

2017年度

活動報告書

Tokai University Student Project Center Activity Report



2017年度チャレンジセンター 活動報告書の発行にあたって

チャレンジセンター長
岡田 工



2006年4月に開設されたチャレンジセンターは、関係各位から強力なご支援を受けながら、2018年3月で12年間にわたる教育活動を継続することが出来ました。これまでに、ご支援をいただきました皆様には一方ならぬご厚情を賜り、お礼申し上げます。

開設当初より、本センターでは、プロジェクト活動を大学による社会的責任(USR)活動と位置付け、地域住民、自治体、NPOから企業とともに社会連携活動を推進してまいりました。プロジェクト活動を通じ、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力に代表される社会的実践力を身につけることを目標として、多くの学生が集い、地域貢献活動を進めてまいりました。2017年度は21件のチャレンジプロジェクトと20件のユニークプロジェクトにて約1900人の学生達がプロジェクト活動を行いました。

2013年度より地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)として「To-Collaboプログラムによる全国運動型地域連携の提案」が採択を受け、地域貢献に向けたプロジェクト活動にも力を注いでまいりました。今年度は、2017年度大学推進プロジェクト「ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業」の中で、チャレンジプロジェクトの中間報告会を開催いたしました。当日は、多くの地域の方々にもご来場いただき、プロジェクト活動の報告ができました。ご来場された皆様には感謝いたします。多世代にわたる地域住民の方々へ説明することによって、学生には、自ら社会的実践力が身に付きました。

また、今年度は、「DAN DAN DANCE&SPORTS プロジェクト」が、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会大学連携17イベント「Tokyo 2020学園祭」でベストパフォーマンス賞を受賞、「阿蘇援農コミュニティプロジェ

クト」が、「第6回食と農林漁業大学生アワード」で「農林水産大臣賞」を受賞しました。また、「3.11生活復興支援プロジェクト」は、国際ソロプチミスト厚木の「災害復興援助クラブ賞」を受賞と一般財団法人学生サポートセンターが支援する「学生ボランティア団体」に初めて選出されました。「ライトパワープロジェクト」は「2017ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ」の世界大会において4位となり、「メカトロマイスター」は、「2017ワールド・グリーン・チャレンジ」(WGC)にて総合2位となり、「先端技術コミュニティACOT」は、「ETロボコン九州北地区大会」にて準優勝しました。これ以外にも各プロジェクトの業績が数多くございますが、本報告書としてまとめてさせていただきますので、ご一読いただければ幸いです。

なお、2018年度は、カリキュラムの改訂により、従来のチャレンジセンター科目が、全学必修の発展教養科目(パブリック・アチーブメント型科目)として「シティズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」の4科目として生まれ変わります。また、プロジェクト活動を支援するための社会的実践力副専攻を設置し、「パブリック・ワーク」や「パブリック・スキル」などの科目を新設してプロジェクトの活動をサポートしてまいります。

今後も本センターは、プロジェクト活動を通じて学生の社会的実践力を伸ばすサポートを進めていきます。今後もチャレンジセンターの活動にご意見、ご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。

2018年3月

2017年度チャレンジセンター 活動報告書の発行にあたって	1
チャレンジセンターの取り組み	3
チャレンジプロジェクト活動報告	5
【湘南キャンパス】	
ライトパワープロジェクト	5
サイエンスコミュニケーター	7
DAN DAN DANCE&SPORTS プロジェクト	9
Tokai International Communication Club	11
キャンパスストリートプロジェクト	12
熊本復興支援プロジェクト	13
3.11生活復興支援プロジェクト	14
病院ボランティアプロジェクト	15
Tokai Formula Club	16
東海大学学生ロケットプロジェクト	16
スポーツ社会貢献プロジェクト	17
Beijo Me Liga	18
【伊勢原キャンパス】	
Challenge for the Borderless World	18
【高輪キャンパス】	
Takanawa共育プロジェクト	19
【熊本・阿蘇キャンパス】	
先端技術コミュニティACOT	20
メカトロマイスタープロジェクト	21
熊本地域プロデュースプロジェクト	21
阿蘇援農コミュニティプロジェクト	22
【阿蘇・湘南キャンパス】	
あにまるれすきゅープロジェクト	23
阿蘇は箱舟プロジェクト	23
【札幌キャンパス】	
札幌ボランティアプロジェクト	24
ユニークプロジェクト活動報告	25
【湘南キャンパス】	
ポリヘドロン工作隊	25
Tokai Dream Space Team	25
東海魅力宅配便	26
【代々木キャンパス】	
よよさんぼ	26
【札幌キャンパス】	
地域連携プロジェクト	26
【清水キャンパス】	
三保活性化プロジェクト	26
【阿蘇・熊本キャンパス】	
阿蘇復興への道	26
プロジェクト学生の声	27
FD研究会	28
チャレンジセンターの活動	29
リーダー研修会	30
ものづくり館訪問一覧	30
チャレンジセンターの支援体制・運営体制	31
プロジェクトコーディネーター・アドバイザー	33
チャレンジセンター開講科目	35
ルーブリックによる参加学生の評価	37
To-Collaboプログラムの取り組み	38
メディア掲載一覧	39
チャレンジプロジェクト協力団体・協力者一覧	39
チャレンジセンター長賞、チャレンジプロジェクト学科別参加人数	40
広報媒体(ポスター・チラシ・パネル他)	41

チャレンジセンターの取り組み

チャレンジセンターは
社会が求める4つの力を育む成長の場です。

自ら考える力 集い力 挑み力 成し遂げ力

常に未来を見据え、自らが
取り組むべき課題を探求する力

多様な人々の力を結集する力

困難かつ大きな課題に
勇気をもって挑戦する力

失敗や挫折を乗り越えて
目標を実現していく力

社会的実践力を身につけ、
高い専門性で社会に貢献できる人材

人類の幸福と平和の実現に向かって、明日の歴史づくりを担う人材を育成するという教育理念のもと、2006年に社会的実践力を育成するチャレンジセンターを発足。チャレンジセンターでは、学生により地域連携プロジェクト、産学連携プロジェクトの活動支援と全学部対象の社会的実践力科目(選択)の実施を担当しています。プロジェクトは、学生による自主企画プロジェクトで、本学の教育目標である「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力の体得を目指し、全国7キャンパスで41プロジェクト、1942人(2017年度)の学生がプロジェクトに参加しています。

チャレンジセンターの教育活動の特徴は

1 理論と実践の相互作用による授業

プロジェクトと連動したチャレンジセンター科目を開講し、その中の社会的実践力科目はいかにして問題に向き合い、解決していくかを、PBL(※1)やアクティブラーニングなどを取り入れることで学習し、ジャーナリズム実践教育科目は社会を批判的にとらえることで、社会の様々な問題を認識する目を養います。

2 教職協働で学生のプロジェクト活動を支援

プロジェクトを教員が専門的な立場から指導するプロジェクトアドバイザー、職員が様々な課題の相談役を務めるプロジェクトコーディネーターを担当し、学生の成長支援に携わっています。

3 8キャンパスで実施されているプロジェクト活動

本学のスケールメリットを活かし、プロジェクトのメンバー構成に学部・学科・学年の横断を課していることから、学生らがface to faceで活動の進捗や今後の計画について話し合うためのミーティングの回数も要件としています。また、全国の拠点8キャンパス周辺地域特有の課題や共通の課題を全ての教職員・学生が共有し、協力して解決策を見出す取り組みとして2013

年度からCOC事業(※2)として「To-Collaboプログラム」を始動しています。

4 第三者評価

今年度はチャレンジプロジェクトの一部に対してルーブリックを実施しており、設定した目標を達成出来たかを振り返ることで自己評価するとともにアンケート調査および地域ニーズ調査から地域の協力者をはじめとする第三者評価を経て、その能力や知識を社会に還元していきます。(P37)また、「振り返りシート」の実施をはじめ、チャレンジプロジェクト中間・最終報告会の開催、各メンバーが今年度にどのような活動を行い、社会に貢献したかを記録する報告書の提出など、年間を通してのプログラムを設定しています。

チャレンジセンターでは、単に知識を身につけるだけでなく、常に未来を見据え自らが取り組むべき課題を探求する力「自ら考える力」、多様な人々を結集する力「集い力」、大きな課題に勇気をもって挑戦する力「挑み力」、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現していく力「成し遂げ力」を修得し、社会的実践力を身につけた学生の育成を目指しています。

※1 PBL(Project Based Learning)…現実の問題または課題についてチームで解決する学習法

※2 COC事業…大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的とする取り組み

チャレンジセンターの教育プログラム

プロジェクト活動(P5~)

学部・学科・学年の枠をこえ、「地域活性」「社会貢献」「国際交流」「ものづくり」「環境・動植物保護」など多様な分野で活動。直面する様々な課題を乗り越える体験を通じて社会的実践力を培います。

チャレンジプロジェクト

- ◆学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
- ◆大学職員によるプロジェクトコーディネーター、教員によるプロジェクトアドバイザーを配置
- ◆メンバーが複数学科に横断して構成されていること
- ◆参加人数が50名以上であること(湘南キャンパス以外は30名以上)

プロジェクト修了認定

チャレンジプロジェクトが以下の条件(抜粋)を満たし、プロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーに授与されます。

- 1 コーディネーターによる推薦
1年間のプロジェクトに積極的に参加し、また、その成果に貢献し「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を身につけたと認められる学生を推薦
 - 2 チームとしての条件
◆プロジェクト協議会へのプロジェクトリーダーの出席 ◆全体・幹部ミーティングの実施 ◆中間報告会(10月)および最終報告会(2月)での発表(P29参照) ◆建学祭での発表 ◆応募要件のプロジェクトを実施するメンバー数を満たしていること 他5項目
 - 3 個人としての条件
◆振り返りシートの提出※1 ◆中間報告会・最終報告会への出席 ◆参加報告書の提出・当該年度7月1日現在プロジェクトに所属し、活動期間が9ヶ月以上であること 他2項目
- ※1 振り返りシート:プロジェクトメンバーは、各企画終了後に省察会を開催し、プロジェクトが設定した「学びのテーマ」を踏まえ活動を実施出来たかを振り返るシートを作成します(年3回)

ユニークプロジェクト

- ◆将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクト
- ◆少人数のグループ(10名以上)で構成
- ◆学生からの希望があり、かつ、人員が配置出来る場合はコーディネーターとアドバイザーを配置

・プロジェクトコーディネーター(職員)
・プロジェクトアドバイザー(教員)
による支援体制

※詳細はP33~34

理論 ⇄ 実践

チャレンジセンター開講科目(P35~)

社会的実践力科目とジャーナリズム実践教育科目からなり、総合大学としての多様性を活かし、学部・学科単独ではできない、社会とのつながりの中で実践的な教育を行っています。

社会に通用する実践力

社会的
実践力科目

時代を生きる情報力

ジャーナリズム
実践教育科目

[2018年度新カリキュラムについて]

2018年度にカリキュラム改編が予定されており、必須科目である現代教養科目が開講予定です。現代教養とは、人々が現在の複雑化した社会を生きるために必要な力です。

本センターでは、東海大学の建学の精神を通じて現代社会を生きるために必要な力を教育します。

1. 文系・理系の垣根を取り払った文理融合的なものの見方、人間・社会・自然・歴史・世界などに対する幅広い視野を培い、人生の基盤となる思想を養う
2. 市民として社会に主体的に働きかけて生きていくための実践力を養う

この2つの教育方針を歯車のようにかみ合わせ、現代教養科目、自己形成科目において、時代に即した教養教育を提供していきます。

現代教養科目は、基礎教養科目(「人文科学」「社会科学」「自然科学」と)発展教養科目(「シティズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」と)に分かれています。基礎教養科目では、知の力の修得を念頭に置き、発展教養科目では、実践力の修得を念頭に置いて、いずれも市民としての教養につながる導入的な授業を展開します。

これらの科目を基に、さらに現代文明論、学部学科の主専攻科目、他の教養科目や自己学修科目などを学び、またチャレンジプロジェクト活動なども連携することにより、東海大学の教育目標の達成に向かっていきます。

チャレンジプロジェクト活動報告

ライトパワープロジェクト

省エネルギー技術を利用したものづくり

達成目標 大会に出場し最高の記録を樹立するとともに、社会に貢献できる活動を展開する

学びのテーマ 社会とのつながりを学ぶ

湘南
ものづくり

プロジェクトリーダー	佐藤喜昭	工学部	機械工学科	3年
サブリーダー	小坂真由子	工学部	航空宇宙学航空宇宙学専攻	2年
サブリーダー	藤本修史	工学部	動力機械工学科	2年
広報リーダー	牟田神楽	工学部	生命化学科	3年
会計	山田康記	工学部	機械工学科	3年
参加人数 128名				

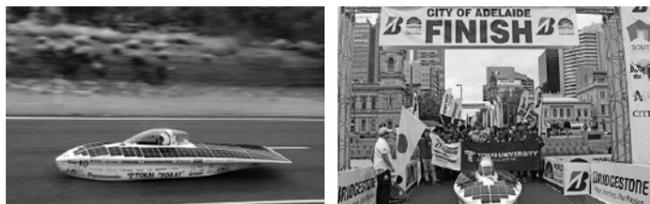
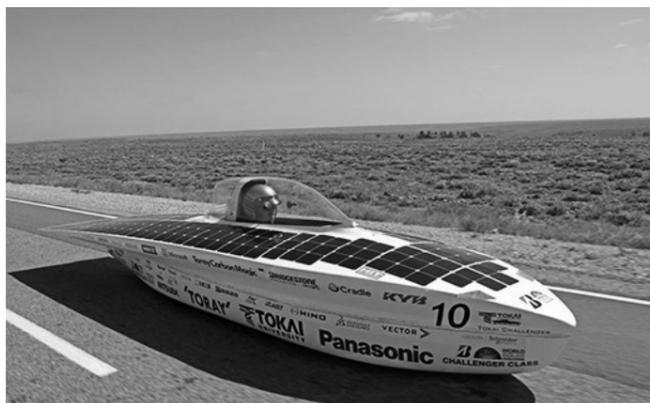
10月8日～15日

ソーラーカーチーム

「2017ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ」4位でゴール到達

■ オーストラリア(ダーウィン～アデレード)

1987年から開催され、今回が30周年となるソーラーカーレースで、世界の22の国と地域から43チームがエントリー。本学は14回目の出場となり、14名の学生と教職員4名、特別アドバイザー8名、計26名のメンバーで、チャレンジャークラスに参戦しました。本学チームは09年と11年に開催された同レースで優勝しており、今大会で世界一奪還を目指し、学生らが新たに『2017年型Tokai Challenger』を製作しました。多数の国内有力企業から協力を得て、太陽電池面積が2/3に縮小されるなど厳しくなった新レギュレーションに対応した新型マシンです。7日に行われた予選により、チャレンジャークラス24台中9位で本戦をスタート。本戦では、オーストラリア北部の都市ダーウィンから南部のアデレードまで総延長約3,000kmの総走行時間を競います。大会1日目にはスタートダッシュを決めて次々とライバルチームをごぼう抜き。一時はトップに立ったものの、曇天や悪天候、強い横風など厳しい気象条件もあり2日目以降は4、5番手争いを強いられる展開になりました。後半戦では3位に6分差まで迫り、表彰台に向けて最後まで粘り強く戦いましたが一歩及ばず、アデレードのゴール地点に4位で到達しました。チームマネージャーの武藤創さん(工学部動力機械工学科2年次生)は、「とにかく、ゴールできたことに興奮しています。しかし、この結果には「まだまだよりよいチームを作らなくてはならない」という気持ちです。皆が集まり、活気のあるチームをこれからも仲間たちと一緒につくりたい」と語りました。



5月5・6日

電気自動車チーム

「ワールド・エコノムープ2017」に出場

■ 大潟村ソーラースポーツライン(秋田県南秋田郡大潟村)

1周2kmのコースを2時間走行し、走行距離を競う「鉛蓄電池部門 オープンクラス」に、昨年度に引き続き電気自動車「ファラデーマジック2」で出場。本選の前半では、他の上位チームのリタイヤが続く中、一時は1位で走行していましたが、マシンの整備不良等さまざまなトラブルが発生し1時間20分ほど走った時点でエネルギー切れによりレースを終え、昨年度より3つ順位を上げ、20チーム中6位、9周(完走距離59.4km)という結果になりました。「WEM-LIGHT部門Aクラス」には、EVカート「INAZUMA IV」で出場。予選ではトップチームと1周差の3位と好位置につけ、本選での優勝を目指すものの、レース本選が降雨のため中止。予選の成績が今年の成績となりました。



8月9日

人力飛行機チーム

「HPA飛行会」で優勝

■ 富士川滑空場(静岡県静岡市)

「鳥人間コンテストに出場できなかったチームの成長をサポートし、鳥人間コンテスト以外で機体・飛行の展示ができる場を提供すること、加えて全国の鳥人間コンテスト出場チームの技術交流」を目的に開催。36名のメンバーが参加し、会場で実際に人力飛行機を組み立てて飛行させる「飛行展示」と、チームTシャツのデザインを投票によって競う「Tシャツコンテスト」に参戦。「飛行展示」では、2017年度製作機体「Aldebaran」を組み立て中に雷雨に見舞われるなどのアクシデントもありましたが、練習飛行から安定した飛行を披露することができ審査でも高評価をいただきました。「飛行展示」には本チームを含め2チームがエントリーしていましたが、もう1チームの機体調整が間に合わず参戦できなかったため、自動的に本チームの優勝となりました。「Tシャツコンテスト」には11チームが参加。本チームは前年度の2位から順位を上げ、「飛行展示」同様、1位を勝ち取ることができました。



3月3日

人力飛行機チーム ソーラーカーチーム

「2017年度キッズチャレンジ」を開催

■ 湘南キャンパス

ものづくりを通じて考える力を身につけ、完成時の達成感を感じてもらおうと、毎年開いているもので、当日は平塚市立みずほ小学校と秦野市立大根小学校、同広畑小学校の児童40名と保護者らが参加しました。はじめに世界大会に参戦したソーラーカー「2017年型Tokai Challenger」の試走を実施。続いて19号館で、「ソーラーカーチーム」と「人力飛行機チーム」が動画やクイズでそれぞれの活動を紹介。休憩をはさんで、子どもたちが学生の指導を受けながら、ソーラーパネルを装着したペットボトルのミニカーと飛行距離の長い紙飛行機作りに取り組みました。



8月6日

人力飛行機チーム

「ライトパワーものづくり教室」を開催

■ 湘南キャンパス12号館第1会議室・高間原第2グラウンド

「地域と大学との交流をよりいっそう深めるとともに、子どもたちにもものづくりの楽しさを伝え、飛行機に関心を抱いてもらう」ことを目的に本プロジェクトの1年次生を中心としたメンバーが毎年企画しています。当日は、キャンパス近隣の平塚市立みずほ小学校、秦野市立大根小学校、同広畑小学校、同鶴巻小学校の児童とその保護者ら約200名が参加。はじめにプロジェクトの活動について動画を上映しながら説明しました。続いて手投げ飛行機を製作。メンバーが飛行機の構造を説明しながら作り方をアドバイスし、その後、飛行機を使ったゲームを楽しみました。



5月27・28日

ソーラーカーチーム

「ル・ボラン カーズ・ミート2017 横浜」で車体展示

■ 赤レンガ倉庫(神奈川県横浜市)

自動車雑誌「LE VOLANT(ル・ボラン)」がプロデュースするオープンエアのモーターフェスで、創刊400号を迎えた2010年5月に第1回目を開催。今年度は、過去最多の約9万5千人が来場しました。メンバーは「2017ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ」の主催者であるブリヂストンのブースで『2015年型Tokai Challenger』を展示。来場者の「どれくらいスピードが出るのか?」「重量は何kgくらいあるのか?」といった質問に答えながら、説明を行いました。また、小さい子どもには、運転席に乗せる体験コーナーも設け、多くの親子連れが来場しました。



11月9日

人力飛行機チーム

「出張ものづくり教室」を実施

■ 東海大学付属本田記念幼稚園(神奈川県伊勢原市)

「幼稚園児に人力飛行機チーム(TUMPA)を知ってもらおう。さらに紙飛行機を製作することで、ものづくりの楽しさを知ってもらおう」ことを目的として実施しました。当日は40名の幼稚園児が参加。教室内で動画を上映し、人力飛行機チームを紹介しました。その後東海大学伊勢原校舎2号館にあるアリーナへ移動し、園児それぞれが紙飛行機を製作。紙飛行機の飛ばし方や調整方法の指導を行い、自分で作った紙飛行機を飛ばしました。また、メンバーが製作した巨大紙飛行機を園児たちに飛ばしてもらいました。



7月10日

電気自動車チーム ソーラーカーチーム

「エコカー教室」を開催

■ 湘南キャンパス

本学と秦野市との提携事業の一環として毎年開催。「小学4年生で学習する光電池と蓄電池について理解を深めてもらうとともに、地球環境保全の重要性を知ってもらう」ことを目的としたもので、当日は秦野市立大根小学校の4年生103名が参加。メンバーの金田篤さん(工学部機械工学科2年次生)らが、電気自動車「ファラデーマジック2」と、ソーラーカー「2015年型Tokai Challenger」の仕組みや性能についての説明とデモ走行を実施。続いて、松前記念館講堂にて藤本修史さん(同)とプロジェクトアドバイザーの木村英樹教授(現代教養センター所長・工学部電気電子工学科)が、ソーラーカーや環境問題に関する講義を行いました。



12月7日～9日

ソーラーカーチーム

「エコプロ2017」に出展

■ 東京ビッグサイト(東京都江東区)

「環境関連ビジネスの創出や技術開発、自然と共生できる暮らし方の提案」などを目的に開催。ブリヂストンからの依頼を受け、『2017年型Tokai Challenger』を展示しました。さらに、ブース内に設けられた特設ステージでチーム総監督の木村英樹教授(現代教養センター所長・工学部電気電子工学科)と学生代表の武藤創さん(工学部動力機械工学科2年次生)、電気整備を担当した山崎翔太さん(工学部電気電子工学科2年次生)、学生ドライバー兼機械班班長の喜多洸介さん(工学部動力機械工学科3年次生)が、ニッポン放送の吉田尚記アナウンサーが進行を務めるトークショーに出演しました。



サイエンスコミュニケーター

湘南
社会貢献

実験を通して科学の楽しさや魅力を伝える

達成目標 理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ メンバー全員が基礎から学びを積み重ね、連携のとれたプロジェクト運営を学ぶ

プロジェクトリーダー	小川沙羅	工学部	応用化学科	3年
サブリーダー	柳下雄真	理学部	化学科	2年
サブリーダー	柳原隆児	理学部	化学科	2年
広報リーダー	佐藤千裕	理学部	化学科	2年
会計	福田祐也	理学部	化学科	2年
				参加人数 66名

5月3日

「多摩センター子ども祭り2017」で真空実験ショーを実施

■ エリアベネッセ多摩センター(東京都多摩市)

「ガーデンシティ多摩センター子どもまつり2017」(主催:多摩センター地区連絡協議会)と合同で開催されたもので、「環境にやさしいエコ実験」と題し、ブースを出展。567名の親子連れが来場しました。はじめにマシュマロやお菓子の入った蓋付き容器を真空にする実験を披露しながら、真空の原理を説明。続けて真空パックや魔法瓶など、真空を応用した身近な技術について解説。空気を抜くことで食材の酸化を防ぎ、より食材を長持ちさせることや、魔法瓶や水筒には真空の空間があるため、熱が伝わりにくく、中身の温度を保つことができることを紹介しました。また、乾燥スープなどに使われるフリーズドライ製法にも真空の技術が使われていることを伝えました。



5月4-5日

「子ども科学館フェスティバル」で科学教室を実施

■ 伊勢原市立子ども科学館(神奈川県伊勢原市)

“科学の面白さを通じて地域の方々とのつながりをつくる”ことを目的に開催。子ども116名、保護者87名が来場し、メンバー30名が科学教室の対応にあたりました。当日は、紙1枚から種模型やバランス風車などのおもちゃを作成する『飛ばそう!回そう!紙のおもちゃ』を開催。『種模型』は紙を実際に存在する種の形に切って、落下させるとくるくる回る様子を体験できるもので、『バランス風車』は折り紙を半分に切り、周りを折って指に乗せたまましゃがみ、立ち上がると折り紙が回転するおもちゃです。遊んでもらいながら、子どもたちにその原理を伝えることで、植物の繁殖の仕方や種が飛ばす時に作用する風の力を教えました。



7月15日

「Global Women in Science and Technology」に3名が参加

■ 横浜シンポジウム(神奈川県横浜市)

「International Network of Women Engineers and Scientists」のメンバーであるアジア13カ国の代表者が報告、議論する国際会議と同時開催されるもので、第7回となる今回は、未来の女性科学者・技術者を増加させるべく、関東に拠点を置く大学、研究機関、企業がブースを出展。「リケジョ」(「理系女子」の略)がトークショーや各ブースでの相談会を通じて参加者に就職・進学に関する情報を提供するイベントとなりました。本学からは、メンバーのほかに工学部の学生と大学院工学研究科の大学院生計7名と研究推進部の職員も参加。ブースでは活動をまとめた動画を流し、理系の学びを生かしたプロジェクト内容を紹介しました。



8月6日

「中高生のための理科体験授業」に協力

■ 湘南キャンパス 18号館

夏休みを利用して本学が毎年開いているもので、学園の附属中等部2、3年生と高等学校1年生を対象に、“大学での体験授業や学生・大学院生との交流を通して理工系の楽しさに触れ、進学意欲を高めてもらう”ことを目的としています。今回は附属の中等部3校、高等学校4校から32名の生徒が参加しました。本プロジェクトでは科学教室を開催し、『色の変化』をテーマに、メンバーが講師となって実験を披露。インジゴカルミンやグルコースを混ぜた溶液に振動を加えると赤・黄・緑に色が変化する『信号反応』や分光器を使った光の変化に関する実験を目にした生徒は「一つひとつわかりやすく説明してもらえたので、原理を理解しやすかった」と話していました。



9月2日

「世界一やりたい科学広場in湘南summer」を開催

■ 湘南キャンパス14号館

“身近なものを使って子どもたちに科学の魅力を体験してもらう”ことを目的に、地域の幼児や小中学生、高校生とその保護者を対象に、本学が各地で毎年開催しているもので、本プロジェクトが企画・運営を担当。当日は50名のメンバーがさまざまな科学実験ショーや体験プログラムを行い、子どもや保護者ら約800名が来場しました。本プロジェクトのほか、ライトパワープロジェクト、ユニークプロジェクトのTokai Dream Space Team、ポリヘドロン工作隊、工学部の研究室、情報教育センターなどが出展。偏光板を使ったステンドグラス製作体験やソーラーカーの展示、プログラミング体験といった多彩な企画で来場者を迎えました。各ブースでは学生や教員がそれぞれの実験や日ごろの活動についてわかりやすく説明し、子どもたちは目を輝かせてプログラムに取り組んでいました。また、特定非営利活動法人ガリレオ工場の滝川洋二理事長(東海大学元教授)や工学部応用化学科の秋山泰伸教授によるサイエンスショーも行い、会場は立ち見の親子連れが出るほどの盛況ぶりでした。メンバーの迫田玲奈さん(理学部化学科3年次生)は、「多くの来場者が笑顔で楽しんでくれている様子を見て感無量です。来場した子どもたちが少しでも理科や科学に興味をもってくれたらうれしい」と語りました。



11月11日

「PTA収穫祭」でブースを出展

■ 秦野市立北小学校(神奈川県秦野市)

“農業の学習を通して児童がコミュニケーションを深める”ことを目的に秦野市立北小学校の主催で毎年開催されており、本プロジェクトは2回目の参加となります。当日は児童309名と保護者83名の計392名が参加。7名のメンバーは、マシュマロを使った『真空実験』とアルギン酸ナトリウム水溶液と塩化カルシウム水溶液を使用した『人工イクラ』の実験を行いました。今回は実験原理を自主的に考える機会にするため、クイズ形式で説明を行いました。児童たちからは自発的に意見が飛び出し、積極的に科学に触れようとする姿勢が多く見られました。



11月11日

「あっぷりング高輪フェスティバル」に参加

■ 高輪区民センター(東京都港区)

輪い輪まつり実行委員会・高輪地区総合支所主催で開催されており、「理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人をつなげる」ことを目的に2015年度より参加。当日は143名の親子連れが来場し、6名のメンバーが『クルクルステンドグラス』の工作実験ブースを出展しました。2枚の偏光板とゼロハンテープを組み合わせ、回すと様々な色や模様が見える工作で、子どもたちは熱心に取り組んでいました。



11月18日

「子ども大学ひらつか奏アカデミー」に出展

■ 湘南キャンパス19号館

平塚市民・大学交流委員会事業主催で、“子どもの知的好奇心や感性を育てる”ことを目的に教職員や学生が講師となり、小学生が楽しめる講座を実施。当日は60名の小学生とメンバー9名が参加し『ファンタスティックエアー実験ショー』と題して空気抵抗について学べる実験ショーと『ミニ空気砲』の工作実験を行いました。大きく動き、後ろでも良く見えるような実験を選ぶことで、より興味を持って見てもらうことができました。



11月26日

「サイエンスアゴラ2017」にブースを出展

■ テレコムセンタービル(東京都江東区)

国立研究開発法人科学技術振興機構が主催するイベントで、これからの「社会とともにある科学」と「科学とともにある社会」の実現を目指し、2006年より毎年開催されています。本プロジェクトは2016年より参加、2回目の出展となりました。当日は、子どもたちと保護者39名がブースに来場。子どもたちが実験に興味を持ってよう、メンバーは参加者と一緒に真空実験のキットを用いて袋菓子、ふた付きのラムネの容器、マシュマロを真空にする実験と色水を入れ、穴を開けたペットボトルをデシケーターで真空にする実験を行いました。少しずつ空気を抜いていく過程で、それらがどのように変化していくのかを観察。膨らみ続けるマシュマロや、ラムネ容器のふたが飛んだりする光景を目にした子どもたちは歓声を上げていました。



DAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクト

湘南
社会貢献

パフォーマンスや身体表現を通じて地域と交流

達成目標 「する(踊る)」「観る」「支える」の人たちが集い1000人以上で公演を創り上げる
学びのテーマ スムーズな組織運営に必要なものは何かを学ぶ

プロジェクトリーダー	横堀美咲	体育学部 生涯スポーツ学科	4年
サブリーダー	藤田真帆	体育学部 生涯スポーツ学科	4年
サブリーダー	町井俊弥	体育学部 生涯スポーツ学科	4年
広報リーダー	相澤かさね	体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科	4年
会計	鈴木杏実	体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科	4年
参加人数 62名			

6月24日

「Tokyo 2020学園祭」でベストパフォーマンス賞を受賞

■ 明治学院大学白金キャンパス(東京都港区)

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会主催、明治学院大学共催によるもので、今回のイベントは6月23日がオリンピックデー及び、全国の大学・短期大学との連携協定締結日であることを記念して企画されたもので、学生グループがさまざまなジャンルでのパフォーマンスバトルを繰り広げました。本プロジェクトはPax Japonica Grooveの『昇竜』の曲にのせて、狐や巫女の姿をしたメンバーが、艶やかかつ迫力あるダンスを披露。関東地区の12大学から参加した16チームの頂点に立ちました。授与セレモニーでは組織委員会常務理事の布村幸彦副事務総長から「さまざまな要素をすべて融合させる独創性に惹かれた」と、受賞理由が述べられました。



10月4日

「DAN DAN DANCE & SPORTS×MDC 2017 秋公演『with』を開催

■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

「全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)」での入賞を目標に活動するMDCの学生たちと本プロジェクトが、地域住民に日ごろの練習の成果を披露しようと実施。今回は『with』をテーマに、2団体が「協力してつくり上げる」「多種多様な作品を披露する」ことをコンセプトとしています。地域住民や学生ら約80名が来場した当日は、『昇竜』を本イベント用にアレンジして踊り、狐や巫女などに扮して迫力あるダンスで会場を魅了。4年次生のメンバー3名は『アノヒノミライ〜過ぎた時間こそ笑え 間違っなかったと言う為の今日だ〜』を力強く踊りきりました。フィナーレでは観客と一緒に簡単な振り付けのダンスを踊り、会場は大いに盛り上がりました。



6月30日

「ボクシングエクササイズワークショップ」を開催

■ 湘南キャンパス15号館多目的室

協栄シェイプボクシング認定インストラクターであるMIWAさんを講師に招き、「本学学生や地域の方々にはボクシングエクササイズを通じて身体を動かす楽しさを体験してもらう」ことを目的とし実施しました。さらにイベント参加者とプロジェクトメンバーが交流を深めるとともに、メンバーの企画運営におけるスキルアップを図り年末に予定されているプロジェクト主催のダンス公演を成功させたい思いからも本イベントは企画されています。当日は、9名の参加者と8名のメンバーが参加。ボクシング未経験者もフィットネスとして楽しむことができ、音楽や掛け声に合わせてボクシングの打つ動きをしながら、参加者全員が思いきり身体を動かすことができました。



10月21日

男子バスケットボール部のホームゲームでハーフタイムショーに出演

■ 湘南キャンパス総合体育館

毎年、体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科の学生が運営を務め、本学で行うリーグ戦の試合に合わせて実施しています。今回が初の参加となる本プロジェクトは「Tokyo 2020学園祭」でベストパフォーマンス賞を受賞したPax Japonica Grooveの『昇竜』の曲にのせたダンスを披露。体育館の広さを生かし、ダイナミックな演技で会場に集まった約1200名を魅了しました。プロジェクトリーダーの横堀美咲さん(体育学部生涯スポーツ学科4年次生)は、「360度全方位から見られるので、フォーメーションや構成を少し変更して臨みました。こんなに大勢の前で踊るのは初めてで緊張しましたが、参加させていただくことができ、光栄でした」と語りました。



12月24日

「DAN DAN DANCE&SPORTS第7回公演『WA』を開催

■ 湘南キャンパス2号館大ホール

“世代やジャンル、所属団体をこえてダンスや身体表現を楽しむ”ことを目的に毎年実施。今年は「輪」「和」「環」など、さまざまな『WA』をイメージしたパフォーマンスをとおして、地域住民や学生、パフォーマー同士が一つの「輪」になり、「WA(ワッ!)」と驚くような公演にしたいという思いが込められています。当日は、ダンス部MDCやバントワリング部、地域のダンスサークルなど15団体が出演し、約200名のパフォーマーが舞台上に立ちました。本プロジェクトは、Pax Japonica Grooveの『昇竜』の曲にのせたダンスを披露。今年学内のさまざまなイベントで踊った演目はさらに磨きがかかり、会場から大きな拍手が送られました。そのほかにも、競技一輪車や創作ダンスなど多様なパフォーマー



10月24日

「Take a chance! ~世界の舞台で活躍する先輩たち~」で演舞を披露

■ 湘南キャンパス2号館大ホール

このトークショーは、本キャンパスで現代文明論など大人数が受講する授業を行う2号館大ホールの改修工事が完了し、こけら落としとして開かれたイベントで、当日は学生や教職員、地域住民ら約1350名が参加しました。本プロジェクトは、「Tokyo 2020学園祭」の「Performance Battle」でベストパフォーマンス賞を受賞したPax Japonica Grooveの『昇竜』の曲にのせたダンスを披露。日本の伝統や文化を身体で表現する演舞で魅了し、踊り終えると会場全体から拍手が巻き起こりました。プロジェクトリーダーの横堀美咲さん(体育学部生涯スポーツ学科4年次生)は、「大学にとって重要なイベントで舞台上に立たせていただくので、責任の重さを感じました。単純に観客を楽しませるのではなく、日本の伝統と文化を美しく表現してこの日に相応しいパフォーマンスをしようと思った。多くの方にご覧いただけて大変うれしく思います」と語りました。



11月3日

「建学祭ホームカミングデー」で演舞を披露

■ 湘南キャンパス

“同窓会員が世代や学部をこえて母校に集い、大学への理解と会員同士の親睦を深める”ことを目的に毎年開催しているイベントで、卒業生やその家族ら約14,000名が来場しました。本プロジェクトは、総合体育館で行われた大懇親会のステージに登場。昨年6月に開催された東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会大学連携「17イベント」Tokyo 2020学園祭(主催:同委員会)の「Performance Battle」でベストパフォーマンス賞を受賞したダンスを披露し、日本の伝統や文化を体で表現する演舞を踊り終えると、会場全体から拍手が巻き起こりました。プロジェクトリーダーの横堀美咲さん(体育学部生涯スポーツ学科4年次生)は、「自分が卒業した大学に足を運ぶ特別な日だと思うので、私たちのダンスで少しでも楽しんでもらいたいという思いをこめました」と語りました。



Tokai International Communication Club

湘南
国際交流

異文化を知って、日本や自分を見つめ直す

達成目標 多文化共生を意識してもらった人数のべ405人

学びのテーマ 身近な多文化共生を実感し、その伝え方を学ぶ

プロジェクトリーダー	寺脇あずさ	文学部	英語文化コミュニケーション学科	2年
サブリーダー	遠藤沙輝	文学部	英語文化コミュニケーション学科	2年
サブリーダー	河西夏希	文学部	英語文化コミュニケーション学科	2年
広報リーダー	伊藤朱音	理学部	化学科	2年
会計	清水優太郎	工学部	材料科学科	2年
				参加人数 55名

5月27日

「TICC Sports Festa」を開催

■ 湘南キャンパス 多目的グラウンド

“本学に在籍する様々な国の留学生と日本人学生がスポーツを通して言葉の壁をこえた交流をする”ことを目的に毎年実施。当日はイタリア、中国、トルクメニスタン、台湾、マレーシアから12名の留学生と日本人学生37名が参加し、5種類の競技を行いました。メンバーは、参加者の多くが経験したことのないアルティメットを競技に加えたり、各競技の前にジェスチャーを交えたルール説明やデモンストレーションを行いました。



6月23日、11月30日

ワークショップ「For the Future」を開催

■ 湘南キャンパス 8号館

6月23日は「日本の未来を考える」と題し、パネルディスカッションやグループワークを実施。学生や教職員、近隣住民ら約30名が来場し、各国の教育が目指す理想像について議論を交わしました。11月30日は「グローバル化していく日本社会『偏見という罠』」と題し、「メディアと偏見の関係性を知る」ことを目的に、学生や教職員14名が参加。田島祥講師(本学現代教養センター)の講演の後、グループワークで「北朝鮮」をテーマに悪いイメージをどうすれば払拭できるか意見を交わしました。



7月1日

「世界の国々をのぞいてみよう～サウジアラビア～」を開催

■ 秦野市立南公民館(神奈川県秦野市)

子どもたちに国際的な視野を広げてもらおうと実施している催しで、秦野市在住の子どもたち16名と保護者12名が来場、メンバー10名が参加しました。本学に在籍するサウジアラビアからの留学生、アルワード・ヤジさん(工学部応用化学科)を講師に迎え、アラビア語でのゲームを楽しむほか、食・観光・宗教・民族衣装の4つのブースにおいてサウジアラビアの文化や習慣を体験できる企画を行いました。



10月26日

「渋沢小学校異文化交流授業」を開催

■ 秦野市立渋沢小学校(神奈川県秦野市)

文化の違いや生活の苦勞を聞き、他者と交流することにより多様な文化を知り、理解を深める”ことを目的に開催。秦野市立渋沢小学校の4年生126名が参加し、はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」のメンバーとプロジェクトメンバー7名が交流しました。外国につながる子どもの保護者に、母国の文化や生活、特に学校生活や家庭生活に焦点をあて話をいただきました。また、それぞれの国の挨拶や習慣などに関するクイズを行い、子どもたちに国際的な事柄に関心を持ってもらうきっかけとなりました。



9月12日

「日本文化交流会」を開催

■ 翰林日本語学院(神奈川県横浜市)

“翰林日本語学院で日本語を学ぶ留学生に対し、日本人との交流の機会を増やす”ことを目的に、15名のメンバーと留学生17名が交流しました。はじめに、お互いの緊張がほぐれるよう『なんでもバスケット』という、参加人数より一人分、少ない数の椅子を円陣に並べ、座れなかった一人に質問をするというゲームを行いました。次に、参加者を4つのグループに分け「餃子づくり」をしながら会話を楽しみ、交流を深めました。



4月12日～7月20日、9月13日～2018年1月18日

「にごティー教室」を実施

■ 秦野市立南公民館(神奈川県秦野市)

秦野市在住で“外国につながるの子どもたち”を対象に、日本語の読み書きや普段の学習のサポートを提供する場として企画。5年目を迎えた今年度の春 semester は計27回、秋 semester は計28回実施。ペルーやブラジル、ボリビアなどにつながるの小・中学生および未就学児のべ826名が参加しました。メンバーは子どもたちと互いに声を掛け合い、宿題や学校での様子を聞き、それぞれの授業の進み方やテスト範囲に合わせて学習を支援。受験生の子にもは受験対策も行いました。



キャンパスストリートプロジェクト

湘南
地域活性

より魅力ある街づくりを提案

達成目標 地域住民と学生それぞれと関わり、双方の積極的な関係の構築を手助けする

学びのテーマ 自発的に問題を発見し解決に導く能力を学ぶ

プロジェクトリーダー	関口雄哉	法学部	法律学科	3年
サブリーダー	山下航生	教養学部	人間環境学科社会環境課程	3年
広報リーダー	太田すみれ	法学部	法律学科	3年
会計	星野颯斗	法学部	法律学科	2年
				参加人数 55名

7月11日～13日

「TOKAI音食WEEK2017」を開催

■ 湘南キャンパス

この街ならではの味を楽しむ“食”と、学生や教職員、地域で活動する音楽団体のパフォーマンスによる“音”とをコラボレーションさせた地域交流イベントです。12年目を迎えた今年、本学建学75周年記念行事の一環として『大好き!♡この街おもてなし』をテーマに開催し、期間中を通して約1000名が来場しました。噴水付近に特設したステージでは、昼の部と夜の部の1日2回、全5回のライブを実施。学内からは、吹奏楽研究会や、ジャズ研究会、チアリーディング部などが出演。8号館前の通りにはキャンパス周辺の10店舗が出店し、昼食時には学生が長蛇の列をつくりました。また今年初めての取り組みとして、ステージ出演者と来場者が交流できるコミュニティーテントの「こみゅてんと」を設置。記念写真の撮影や、同プロジェクトが用意した横断幕にステージの感想や出演者への応援のメッセージが書き込まれるなど、参加者はさまざまな形でイベントを満喫しました。



10月8日

「花壇植栽」を実施

■ 小田急線東海大学駅前広場(神奈川県秦野市)

“商店街と本学のつながりを発信する”ことを目的に、花壇のデザイン提案や東海大学駅前商店会協同組合の方々と花の植え替えを実施。商店会の方20名、プロジェクトメンバー8名が参加しました。夏に伸びた雑草を処分し、黄色と紫色の2色のパンジーを、大小の円が重なるようなデザインで配置し、本学と地域のつながりを表現。また、駅を利用される方に向けて本企画を紹介する看板も設置しました。



10月28日

「Tokai HALLOWEEN TOWN」ワークショップを開催

■ 小田急線東海大学駅前広場(神奈川県秦野市)

“学生と地域住民の方々、特に子どもたちとの交流を生み出す”ことを目的に東海大学駅前商店会と協力し、初めて開催しました。当日は地域の親子連れやお年寄りなど40名が来場し、『フォトブロップス』と紙皿、色画用紙を使用した『リースの紙工作』を行ないました。テント横にはフォトブースを設置。全てのスタンプがたまるとお菓子をプレゼントするスタンプラリーも実施しました。



12月5～26日

「クリスマスU-night2017」を開催

■ 小田急線東海大学駅前広場(神奈川県秦野市)

地域住民と学生と一緒にクリスマスの雰囲気を感じ、積極的に交流できる場を創出することで、明るく活気のあるまちづくりにつなげよう企画したものです。12月5日には駅前広場に設置した高さ約5mのクリスマスツリーの点灯式を実施。メンバーの合図で約2400個のLED電球が散りばめられたツリーが光り輝きました。秦野市立大根幼稚園の園児と作成したペットボトルライトも色鮮やかに点灯した後、ゴスペルクワイヤの「GOSPEL CHOIR 1Cube」、女性シンガーの千明さんや柚香さんがクリスマスソングなどを披露し、点灯式に華を添えました。さらにDAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクトのメンバーが会場を盛り上げました。12月16日にはツリーの下でワークショップを開催。『クリスマスブーツづくり』のブースやサイエンスコミュニケーターによる科学体験教室『雪降る試験管づくり』のブースを設置したほか、地域の飲食店によるカフェなども出店しました。



熊本復興支援プロジェクト

被災者の声を届けたい

達成目標 日本に住むすべての人に熊本の被災地の現状を正しく知っていただく

学びのテーマ 被災地の現状を伝えるため、文章力、プレゼン力、企画力、呼び込み力を学ぶ

湘南代々木 伊勢原
清水 札幌 社会貢献

プロジェクトリーダー	作田瞬	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	3年
サブリーダー	竹内清隆	教養学部	人間環境学科自然環境課程	3年
広報リーダー	両角拓真	政治経済学部	政治学科	3年
会計	柳澤光大	工学部	応用化学科	3年

参加人数 52名

4月14日

「阿蘇の声から学ぶ 防災工作体験」を開催

■ 湘南キャンパス 8号館

被災した農学部学生や仮設住宅に住む住民らと交流したメンバーたちは、現地でも聞いた声を届けるべく、イベントを企画。当日は、メンバーの作田瞬さん(工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻3年次生)が、熊本地震当時の様子や被害状況について、被災者の体験談を交えて説明。続いて、プロジェクトリーダーの津田哲平さん(文学部心理・社会学科4年次生)が「地震発生後のシミュレーション」をテーマに、自宅、キャンパス内、アルバイト先で被災した際の避難の方法を紹介しました。その後、参加者とグループに分かれて避難所にもあると思われるダンボールやゴミ袋、新聞紙、ペットボトルなどを使って防災工作に挑戦するワークショップも実施しました。



11月25日

「かながわ学生福祉防災大会」に参加

■ かながわ県民センター(神奈川県横浜市)

“東日本大震災を機に芽生えた若者の被災地支援を防災の取り組みに発展させるために、県内の高校・大学生が共助の在り方を考える”ことを目的に初めて開催され、本プロジェクトは“熊本地震の被災者の声を全国に届ける”ために参加しました。当日は、どのような被災地支援活動を行ってきたかを発表する活動報告の後、3班に分かれ、学生が参加しやすい被災地ボランティア活動のプランを考えるグループワークを行いました。また、「風化防止」や「学生の意識向上」といった共通して抱えている課題について意見交換を行い、今後協力して学生向けにイベントを開催し、防災啓発活動を行っていきたいと合意。今後の活動に弾みがつきました。



8月25~29日

熊本県内各地で交流活動を実施

■ 熊本県内各地

現地を訪れたメンバー6名は、初日に熊本県内で活動するボランティア団体「RQ九州」とともに益城町を訪問。2、3日目には阿蘇援農コミュニティプロジェクトの夏期援農活動に参加。西原村の農家でアスパラガスの剪定や収穫作業に取り組みました。3日目の午後からは南阿蘇村へ移動し「復興ミュージアム」などを訪問。4日目は阿蘇キャンパスを見学後、ユニークプロジェクトの阿蘇復興への道の学生と村内を周り、地震当時の様子やこれまでの心境の変化などを聞きました。その後、熊本キャンパスで阿蘇援農コミュニティ、阿蘇復興への道のメンバーと交流会を開催。最終日には、益城町内の仮設住宅を訪問。「お茶会」で交流を深めたほか、清掃活動を行いました。



2018年1月12~14日

熊本県内でのボランティア活動や地域住民らと交流

■ 熊本県内各地

現地を訪れたメンバー8名は、初日に南阿蘇村立野地区を訪問。新阿蘇大橋の建設地を見学したほか、住民らにインタビューも行いました。2日目には益城町内の農家で援農活動を実施。ニラ畑で雑草の除去作業などに取り組みながら、熊本県の農業の現状などを聞きました。最終日には、益城町のテクノ仮設団地で子どもたちとサッカーなどで交流したあと、花壇の手入れや掲示板を整備。プロジェクトリーダーの作田瞬さん(工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻3年次生)は、「復興が進んでいると感じる場所もありましたが、風化も同時に進行し、復興に向けた速度が遅くなっている一面があることもわかりました。現地での活動はもちろん、湘南キャンパス周辺でもできる活動にも力をいれたい」と語りました。



3.11生活復興支援プロジェクト

被災地の“持続可能な復興”を支援

達成目標 地域に合った復興段階と工程を考える

学びのテーマ 自ら行動し、現在ある問題を発見する能力を学ぶ

湘南
社会貢献

プロジェクトリーダー	杉山愛	政治経済学部	経営学科	2年
サブリーダー	小川貴大	工学部	建築学科	2年
広報リーダー	大谷海星	工学部	光・画像工学科	2年
会計	添田友恵	政治経済学部	経営学科	2年

参加人数 58名

8月4日

「電子工作教室」を実施

■ 結っ小屋(岩手県大船渡市)

ユニークプロジェクト・きらきら実験教室と共催で、“地域の人々との交流”を目的に、2011年度から実施しています。地元小学2年生から6年生の14名が参加し、メンバーの指導を受けながら地元の海岸で集めた貝殻を使ったフロアライトと、マイクロコンピュータを使ったタイマーを工作しました。バーベキュー大会も行い、親睦をさらに深めました。



11月26日

「第7回大門市」で「東北物産展」を出展

■ 平塚八幡宮大門通り(神奈川県平塚市)

大門通りと中心商店街の活性化、相模川より西の地域では平塚市が「市」の発祥の地であり、平塚八幡宮の参道でもあることを再認識しようといわれたもので、本プロジェクトは、東日本大震災で被災した地域に対する継続的な復興支援活動の一環として参加。当日は復興ステーションを設置し、活動地域の一つである宮城県石巻市小指地区の住民から直接取り寄せたわかめと昆布、とろろ昆布の販売と、どんぐりチャンネルの放映を含めた活動紹介を行いました。



8月20日

「ウッドデッキ 完成式」を開催

■ 小指観音堂(宮城県石巻市)

震災以降の地区のコミュニティ再生の拠点づくりを目指して「どんぐりハウス(現、小指観音堂)」を建設しましたが、スムーズに出入りしにくいことや、使用目的が明確でないなどの理由から、住民の方が集う機会が少ない現状を打開しようと、入口の足場を改善するウッドデッキの設置を企画。メンバー計19名が製作に取り組みしました。完成式には近隣住民の皆さんも多数参加し、総勢40名で完成を祝いました。



12月1日

「ソロプチミスト日本財団 災害復興援助クラブ賞」を受賞

■ レンブラントホテル厚木(神奈川県厚木市)

本賞は、被災地における復興のための活動ならびに日本各地における被災者支援を実施している団体に対し、活動が継続できるよう援助を行うものです。本プロジェクトでは、“持続可能な開発のための復興支援”を理念に掲げ、岩手県大船渡市や宮城県石巻市を中心に支援活動を実施しています。その実績が評価され、今回の受賞となりました。贈呈式には、サブリーダーの小川貴大さん(工学部建築学科2年次生)が出席し、賞状と副賞が手渡されました。



11月19日

「結の道・第二期開通式」を開催

■ 三陸町越喜来泊地区(岩手県大船渡市)

2014年8月より計画を進めており、全長800mのうち約200mの区間が完成し、昨年開通した区間と合わせて450mに延伸しました。“今回完成した区間を地域住民に知ってもらうこと”を目的に開催し、約30名が参加。泊区の林区長、泊地区のまちづくりに協力しているNPO法人アーバンデザイン研究体の金子哲也氏、プロジェクトリーダーの杉山愛さん(政治経済学部経営学科2年次生)によるテープカットが行われ、参加者とともに開通を祝いました。



通年

毎月の調査活動

■ 相川・小指・泊地区

【相川地区・小指地区】

- 4月22・23日、5月20・21日、6月17・18日、7月22・23日、10月28・29日、12月2・3日：地区住民との会議、小指観音堂・ウッドデッキのメンテナンス、被災地調査など
- 【泊地区】
- 4月22日：倉庫の整理、敷地の確認と測量
- 4月23日：泊地区主催のお花見に参加
- 5月27・28日、6月26日、7月30日、10月1・28日：結の道の整備
- 10月28日：泊地区で育てているそばの脱穀作業、花プロジェクトの椿油工場の見学
- 10月29日：浦嶺地区のそば作りに参加し、そばの作り方を学ぶ
- 12月2日：結っ小屋のイルミネーションのお手伝い、地域の方と椿マップについての話し合い、三陸駅にて星観察イベントに参加
- 12月3日：元そば畑に水仙の球根を住民の方と共に植える、結の道の階段の土止め作業

病院ボランティアプロジェクト

湘南
 社会貢献

病院と社会をつなぐ架け橋となる

達成目標 活動に必要な知識を身につけ、相手を尊重した上で寄り添う

学びのテーマ ファシリテートを学ぶ

プロジェクトリーダー	後藤佑介	法学部	法律学科	2年
サブリーダー	渡邊花香	工学部	医用生体学科	2年
サブリーダー	橋本啓吾	教養学部	国際学科	2年
広報リーダー	後藤佑介	法学部	法律学科	2年
合計	渡邊花香	工学部	医用生体学科	2年

参加人数 51名

6月5日～12月15日

「病棟ボランティア活動」を実施

■ 本学医学部付属病院(神奈川県伊勢原市)

小児病棟、混合病棟、内科病棟、成人病棟、整形外科病棟において計45回のボランティア活動を行い、25名のプロジェクトメンバーが参加しました。混合病棟では食事の配膳、下膳や食事介助、食事量のチェック。整形外科病棟・内科病棟では食事介助、ベッドサイドケア、患者の患部を冷やす氷枕の作成、病棟の清掃。小児病棟では子どもたちの遊び相手やおもちゃの消毒など、各病棟のニーズにあった活動を行いました。



6月5～10日

「病院ボランティアプロジェクトの軌跡」を開催

■ TOKAIクロスケア

活動風景の写真や活動の概要を記載したパネルや、今までに制作した絵本を展示。中でも絵本は、実際に手にとって読めるように展示され、読み聞かせをする親子や、一冊一冊じっくり読む方など、熱心に絵本を読まれる方たちの姿が印象的でした。プロジェクトリーダーの後藤佑介さん(法学部法律学科2年次生)は「今後も私たちの活動を広く知ってもらえるよう建学祭などでもこのような展示を行っていきたい」と語りました。



6月30日

「手づくり絵本の読み聞かせ会」を実施

■ 秦野市立大根幼稚園(神奈川県秦野市)

“子どもたちに医療や健康についてわかりやすく伝える”ことを目的として開催。当日は保護者の迎えを待つ時間を活用して17名の園児たちに対し、免疫に焦点を当てた絵本「みんなのげんきのひみつはなあに？」と点滴が苦手な子どもたちにその大切さを知ってもらうための絵本「ハナちゃんどてんてき」の2冊の読み聞かせを行いました。会の最初には園児たちが初めて接するメンバーに緊張しないよう、ミニゲームも行いました。



9月16日

「癒しのイベント」を開催

■ 医学部付属大磯病院(神奈川県中郡大磯町)

“入院中の患者さんのストレスの軽減”などを目的として、毎年、企画しているもので、今回は「夏の日～輪く歌謡祭 in 大磯～」と題して開催。約80名が来場しました。前半は、日本民謡の鳳蝶流の3名が「炭坑節」「銀座カンカン娘」など5曲を披露。後半は神奈川県立秦野総合高校合唱部の生徒10名が「津軽海峡冬景色」「ディズニー・メドレー」など5曲を熱唱。「ふるさと」は来場者とともに合唱し、会場を盛り上げました。



12月16日

「院内コンサート」を開催

■ 本学医学部付属病院(神奈川県伊勢原市)

“入院中の患者さんやその家族らに楽しんでもらう”ことを目的に企画・実施。“聖夜の音楽会～サンタが伊勢原にやってくる～”と題し、伊勢原市や秦野市、厚木市を中心に活動しているミュージックベルの演奏グループ「ミルクウェイ」と「秦野市吹奏楽団」が出演し、約150名が来場しました。ミルクウェイは、日本の歌メドレーや歌謡曲、クリスマスソングを披露。秦野市吹奏楽団は、クラシックから「クリスマス・イブ」などのナンバーを軽快なリズムで奏でました。



2018年3月10日

「手づくり絵本の贈呈式」と「読み聞かせ会」を実施

■ ちどりこどもクリニック(神奈川県厚木市)

“子どもたちに健康や治療の大切さを伝えること”を目的として毎年絵本を制作しています。今年度は「かなちゃんごうら～ねることのたいせつさ～」(イラスト・佐藤花菜子さん(教養学部芸術学科デザイン学課程2年次生))を制作。中心になって企画した後藤佑介さん(法学部法律学科2年次生)と矢吹真菜さん(工学部医用生体工学科1年次生)が、監修を務めた同クリニックの久保田千鳥院長に絵本を手渡し、近隣から集まった子どもたちに、読み聞かせを行いました。



Tokai Formula Club

湘南
 ものづくり

車体製作技術だけでなく、人間力もアップ

達成目標 全日本学生フォーミュラ大会総合優勝

学びのテーマ 社会的実践力の獲得に必要なプロセスを学ぶ

プロジェクトリーダー	麻亮太	工学部	動力機械工学科	3年
サブリーダー	尾池航	工学部	動力機械工学科	3年
サブリーダー	当麻晴音	工学部	動力機械工学科	2年
広報リーダー	村田凌太郎	工学部	動力機械工学科	2年
合計	高野望	工学部	動力機械工学科	3年

参加人数 73名

9月4～9日

「第15回 全日本学生フォーミュラ大会」に出場

■ 小笠山総合運動公園エコパ(静岡県袋井市)

本大会は学生自ら設計・製作した車両を用いてものづくりの総合力を競い、知識を培うとともに、マネジメント能力などを高めようと毎年開催されているもので、本プロジェクトはフォーミュラカー「TF2017」で出場。車両を走行させて行う「動的審査」と各種書類やプレゼンテーション能力等を審査する「静的審査」を経て、26位となりました。



11月26日

「第58回湘南ヒストリックカークラブ SHCCミーティング」に出展

■ 大磯ロングビーチ(神奈川県中郡大磯町)

湘南ヒストリックカークラブが主催する本イベントに、17名のプロジェクトメンバーがイベントのサポートとして参加。プロジェクト紹介のブースも出展し、ピラの配布、車両とデザインパネルの展示と「TF2017」が走行している動画を流し、活動紹介を行いました。また、自動車関係の方や他大学の学生フォーミュラOBの方と交流を深めることができました。



12月2日

「スズキ支援校合同報告会」に参加

■ グランドホテル浜松ゲストハウス(静岡県浜松市)

スズキ株式会社の支援で全日本学生フォーミュラ大会に出場しているチームが参戦報告を行うもので、メンバー5名が参加。代表校の京都工芸繊維大学と金沢工業大学からチーム運営やプレゼンテーション審査について報告があり、続いてスズキ社員で学生フォーミュラOBの方が講演。その後各グループに分かれて車両や静的審査について討論会を行いました。



東海大学学生ロケットプロジェクト

湘南
 ものづくり

ハイブリッドロケットを研究開発

達成目標 より効率的なロケットシステム開発のための組織づくり

学びのテーマ 団体の一員として役割や責任を学ぶ

プロジェクトリーダー	中嶋大介	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	谷口友望	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	櫻並京次郎	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
広報リーダー	片倉絵理	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	2年
合計	阿部宗生	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	3年

参加人数 74名

4月29・30日

「ここにこ超会議2017」に出展

■ 幕張メッセ国際展示場(千葉県千葉市)

『～飛行機・ロケット・空・宇宙等が好きでたまらない～』をテーマにした東京とびもの学会主催による併催イベントに参加。ロケットなどの展示を行いました。当日は15万4千名以上がイベントに訪れる中、本ブースには約120名が来場。超音速Tシャツの販売や、30日にはプレゼンエリアにて燃焼実験のパブリックビューイングも行いました。



8月17～22日

「第13回能代宇宙イベント」に参加

■ 落合浜海水浴場跡地(秋田県能代市)

“最高到達点10km”を目指し、ハイブリッドロケット45号機の打ち上げ実験を実施。今回は下級生への技術継承を目的としており、1.2年次生が中心となって機体を製作。さらに、人工衛星の開発に取り組む「東海大学衛星プロジェクト」と協力して製作した衛星も搭載しました。打ち上げではおよそ200mまで上がったものの、パラシュートが開かず落下。詳細なデータを得ることはできませんでした。



2018年2月28日～3月7日

ハイブリッドロケット打ち上げ実験

■ 大樹町多目的航空公園(北海道広尾郡大樹町)

“自主開発タンクの動作実証”を目的に、ハイブリッドロケット46号機の打ち上げ実験を実施。しかし、機体の不具合に加えて大雪や強風により打ち上げを延期するなど不運も重なり、予定期間内に打ち上げることが不可能となりました。なお、今回の実験に合わせて『ゆめロケット!』企画(小学生に将来の夢を題材とした絵を公募し機体に貼りつける)を実施し、平塚市や北海道を中心に115点の応募がありました。



スポーツ社会貢献プロジェクト

湘南
社会貢献

スポーツ社会貢献の新しい形を発信

- 達成目標 スポーツの生み出す「繋がり」を社会に広げる
- 学びのテーマ スポーツの社会的役割を学ぶ

プロジェクトリーダー	中嶋亮太	体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科	3年
サブリーダー	永石遼明	工学部 土木工学科	3年
サブリーダー	望月美和子	体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科	3年
広報リーダー	馬場湖の珠	体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科	3年
合計	鈴木美沙子	体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科	3年
参加人数 104名			

5月5日
「第39回秦野子どもまつり」にて
スポーツブースを出展
■ 秦野カルチャーパーク陸上競技場(神奈川県秦野市)

“スポーツの楽しさを感じてもらい、家族間のコミュニケーションを促進する”ことを目的にブースを出展。会場には多くの親子連れや小学生が来場し、親子一緒に楽しめるように、投げたフリスビーを網でキャッチする『フライングゲット』、キャタピラ状の段ボールに入って速さを競う『障害物リレー』など6種類のスポーツゲームを用意しました。またこれまでの活動をまとめたチラシを来場者に配布し、プロジェクトの紹介を行いました。



5月20日、11月11日
「ノルディック
ウォーキング教室」を実施
■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

“ウォーキングを通じた平塚市在住の高齢者との交流”を目的として、同館より依頼を受け実施。5月20日は、10名が参加。公認インストラクターの資格を持った学生を含むメンバー9名が指導にあたり、往復5kmの道のりを、会話や景色を楽しみながら全員で歩きました。11月11日は13名が参加。メンバー17名が歩き方のコツやノルディックボールの使い方などを説明したのち、準備運動をして歩き始めました。一人ひとりにメンバーをつけて歩くことができ、細やかな指導ができるとともに親睦を深めることができました。



9月30日、10月7日、10月28日
子どもの家でイベントを実施
■ みなと子どもの家、大野子どもの家、山城子どもの家(神奈川県平塚市)

平塚市より依頼を受け、“体を動かす楽しさやスポーツを通して仲間とコミュニケーションを図る”ことを目的に開催。9月30日はみなと子どもの家で児童34名、メンバー19名が参加。10月7日は大野子どもの家で児童35名、メンバー16名が参加。28日は山城子どもの家で児童46名、保護者2名、メンバー23名が参加。いずれのイベントも、「宝探しゲーム」「名探偵ゲーム」「ビリビリミュージック」に挑み、交流を深めました。



10月1日
「ニコニコ教室」を実施
■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

“体を動かしながら親子でコミュニケーションをとる”ことを目的として同館より依頼を受けて開催。1歳から2歳の幼児24名と保護者25名が参加。メンバーはダンスや動物あてっこなど4種類の運動を紹介しました。「アニマルレース」という遊びでは、色のついたペットボトルに向かって輪投げをしてもらい、入った色の動物の真似を親子で競争しながら楽しみました。



12月9日、16日、2018年1月4日
「スポーツ教室」を開催
■ 東海大学土屋野球場(神奈川県平塚市)、湘南キャンパス総合体育館・サッカー場

“地域の子どもたちにスポーツや身体を動かす楽しさを知ってもらうこと”を目的として開催。12月9日は「野球教室2017」を実施し、小学生約60名が参加しました。12月16日は「バスケットボール教室2017」を実施、小学生ら66名が参加。2月4日は「サッカー教室2018」を実施し、幼稚園の年長から小学校高学年までの約110名が参加。本学硬式野球部、男子バスケットボール部、女子サッカー部と協力してイベントを運営しました。



2018年1月13日
「第10回東海スポーツDAY」を開催
■ トッケイセキュリティ平塚総合体育館(神奈川県平塚市)

“地域に住む多くの方々とスポーツを通じた交流をする”ことを目的に、毎回対象を変えてイベントを企画しており、今回は小学生を対象に実施。メンバーは近隣の小学校にチラシを配布して、イベントへの参加を呼びかけ、64名が集まりました。最初にアイスブレイクとしてフォークダンスのジェンカに合わせてじゃんけんをするゲームなどを行い、その後チームに分かれて『スポーツ鬼ごっこ』『キンボール』『障害物競走』などを実施しました。



Beijo Me Liga

湘南
国際交流

ブラジル人学校とのつながりを中心とした異文化交流

- 達成目標 外国籍の子どもたちと地域の人々が触れ合う場をつくる
- 学びのテーマ 異文化交流による異文化理解を学ぶ

プロジェクトリーダー	澤口菜乃	教養学部 国際学科	2年
サブリーダー	八木友里花	教養学部 国際学科	3年
サブリーダー	吉村龍太郎	工学部 生命化学科	3年
広報リーダー	渡辺創太郎	工学部 生命化学科	3年
合計	辻谷幸奈	工学部 生命化学科	3年
参加人数 99名			

4月8日
「第6回イースター祭」を開催
■ エスコラ・アクアレラ・ブラジル(神奈川県厚木市)

アクアレラに通う子どもたちに祖国の文化を楽しんでもらおうと実施。子どもたちとその保護者42名、東海大学生12名が参加。イースター祭のシンボル「イースターバニー」の耳をつけて、メンバーが事前に隠しておいた200個の「イースターエッグ」を公園内から探し出す「エッグハント」を行いました。色とりどりに飾り付けられた卵には飴玉が詰まっており、子どもたちは楽しそうに探していました。



7月9日
「フェスタジュニーナ」開催に協力
■ 青年の家跡地自然園(神奈川県厚木市)

収穫を祝うブラジルの伝統的なお祭り、愛甲郡愛川町に居住するブラジル人らの呼びかけに本プロジェクトが応じ協力。プロジェクトメンバー25名、OBら10名のほか、本学学生15名の総勢50名が会場設営やブース出展などをサポートし、ブラジル人の子どもたち・保護者50名とともに「クアドリーリャ」と呼ばれるダンスや輪投げなどのゲームを楽しみました。



8月5日
「Multi Culture Camp 2017」を開催
■ 湘南キャンパス 10号館

“子供たちに未来の自分を自由に描いてもらうために、狭いコミュニティの幅を広くするきっかけ作り”を目的として開催。Escola Opcao、日伯学園、長野のブラジル人学校の方、一般の方など約150名が参加。オリジナルTシャツ作りやスポーツ大会、夏祭り、即興パフォーマンスを披露する「サラウ」など、3日間にわたり様々なアクティビティを実施しました。



Challenge for the Borderless World

伊勢原
社会貢献

様々な壁を越えて市民が自然と集まるための架け橋となる

- 達成目標 国境、マイノリティ(障がい/LGBT)、世代、農業、教育、医療といったあらゆる枠組みを越えたsocial capital(人のつながり)の創生
- 学びのテーマ 地域と信頼関係を築くための方法、グローバルな問題を市民にわかりやすく伝え、議論を深める方法を実践を通して学ぶ

プロジェクトリーダー	藤田耕己	医学部 医学科	6年
サブリーダー	北野航大	医学部 医学科	5年
サブリーダー	大川真代	医学部 医学科	6年
広報リーダー	金田結乃	医学部 医学科	5年
合計	小野村樹	医学部 医学科	5年
参加人数 34名			

6月17日、11月2日
「伊勢原イドバタ会議」を開催
■ だいろくコミュニティ広場 来るりん(神奈川県伊勢原市)、伊勢原キャンパス

6月17日は、市民18名とプロジェクトメンバー11名の合計29名が参加。3グループに分かれ、「健康」「食」「教育」「趣味」から1テーマを選んでディスカッション。最後に代表者がそれぞれの結果を発表しました。11月2日は近隣住民やメンバーら15名が参加。「健康」をテーマに、それぞれの体験をもとに意見を交わしました。



7月13日
スマナ・バルア氏を招いて講演会を開催
■ 伊勢原キャンパス

海外でおきている事象と自分たちの生活に共通の課題があることを、地域の人々とともに学び合う機会にしようと企画したもので、バングラデシュ出身で星槎大学特任教授のスマナ・バルア氏(元・世界保健機関(WHO)ハンセン病対策プログラム・チームリーダー)を招いて「人生を分かち合う〜日本の若者に伝えたいこと」をテーマに講演会を開催。学生や教職員、伊勢原市民ら多数が聴講しました。



10月28日
「成瀬ふれあい祭り」に参加
■ 伊勢原市立成瀬小学校(神奈川県伊勢原市)

児童や保護者との交流を通じて活動を紹介するとともに地域との新たなつながりをつくろうと取り組んだもので、メンバー11名が参加。膝蓋腱やアキレス腱の反射、聴診器による心音確認をはじめ、人形を用いた心臓マッサージやAEDの使用方法などについて説明。白衣や聴診器などを身につけての写真撮影も人気を集めました。



Takanawa共育プロジェクト

高輪
 地域活性

高輪地区の活性化を目指して

達成目標 大学と地域の一体化

学びのテーマ 地域貢献を通して連携を学ぶ

プロジェクトリーダー	崎山奨	情報通信学部	経営システム工学科	3年
サブリーダー	高橋優斗	情報通信学部	通信ネットワーク工学科	2年
サブリーダー	加藤航太	情報通信学部	組み込みソフトウェア工学科	2年
広報リーダー	田中千咲子	情報通信学部	情報メディア学科	2年
会計	永嶋淳	情報通信学部	情報メディア学科	3年
参加人数 36名				

5月4・5日

「高輪のれんノ市」に参加

■ 高輪キャンパス周辺

15名のプロジェクトメンバーが2日間、会場設営や交通整理、ゴミ回収などの清掃活動で運営をサポートしました。本キャンパス内に設営したブースでは、東日本大震災からの復興支援活動を通して交流を深めてきた宮城県気仙沼市の物産展を開催。南三陸町名物の「お山のマドレーヌ」を販売したほか、熊本県熊本市の和菓子店「長寿庵」の人気商品「いきなり団子」を販売し、いずれも完売しました。



5月20・21日

「浅草神社例大祭(三社祭)」に参加

■ 浅草神社(東京都台東区)

「高輪神輿同好会」の協力により、今年も参加。両日で8名のメンバーが、浅草神社の氏子町会のひとつである千束二丁目町会のみこしや、浅草神社の本社みこし「一ノ宮」を担いで練り歩きました。プロジェクトリーダーの崎山奨さん(情報通信学部経営システム工学科3年次生)は「初参加のメンバーも多かったのですが、みんなで頑張ってみこしを担ぎ、高輪のみこし同好会の方から「よく頑張ったね」とねぎらっていただきました」と語りました。



7月22日

「TAP 夏まつり 2017」に参加

■ 高輪子ども中高生プラザ(東京都港区)

地域の小学生から高校生までを対象に行われているイベントで、プロジェクトメンバーと本キャンパスで実施しているたかなわ子どもカレッジ「ハンドベルクラブ」の指導にあたった情報通信学部生の計25名が参加しました。学生たちは、前日から会場の設営を手伝ったほか、当日は子どもたちと一緒にハッシュドポテトとジュースの出店を担当しました。またステージイベントでは「ハンドベルクラブ」の発表会も行われました。



7月30日、8月19・20日、8月26・27日、9月2・3日

高輪地区の夏祭りをサポート

■ 白金児童遊園・高野山東京別院・泉岳寺前児童遊園・メリーロード商店街(東京都港区)

7月30日は「TAKANAWA盆ダンスフェスティバル」で、13名のメンバーが会場設営・片付けなどを行いました。8月19・20日は「高野山別院盆踊り」でメンバー7名が盆踊りや屋台のサポートとピンボールなどのキッズコーナーを担当しました。8月26・27日は「高輪泉岳寺商店会夏祭り盆踊り大会」が行われ、メンバー5名が会場設営や受付、屋台の手伝いを行いました。9月2・3日は「高輪神社例大祭」にメンバー3名が参加しました。それぞれに、地域の方々や他団体・他大学と力を合わせお祭りを支援しました。



11月3日

「東海大神輿」を開催

■ 高輪キャンパス

建学祭の一環として「地域貢献」を目的に開催し、今年で2回目になります。当日は地域の方々を含め約100名の方が来場し、メンバー15名と一緒に高輪キャンパス周辺を練り歩きました。今年はキャンパス内でもみこしを担ぎ、多くの観客が集まり大盛り上がりとなり、地域の方々との関係がより深まったように感じました。協力いただいた縄の会の方々からは「来年も交流を深めたい」とお言葉をいただきました。



12月4～25日

「クリスマスイルミネーション」を開催

■ 高輪キャンパス

1号館と3号館を青と金のLEDで飾りつけ、2号館は赤やピンクのLEDで華やかに彩りました。1号館の正面玄関に続く渡り廊下も、夜空をイメージして柵と天井を飾りつけました。12月4日の「点灯式」にはメンバーや教職員、「たかなわ子どもカレッジ」に参加している小学生とその保護者ら約30名が参加しました。また12月13日には、合唱などでクリスマス気分を盛り上げる「タカナワナイトステージ」を開催しました。



先端技術コミュニティACOT

熊本・阿蘇
 ものづくり

先端技術を活用したシステム開発と社会貢献

達成目標 ETOロボコン全国大会での上位入賞及び、地域への技術支援。VR・ドローン技術等の先端技術を身につけ、社会的な実践力・コミュニティ力を培い、社会貢献に繋げる。

学びのテーマ 社会で求められる技術に対する挑み力とコミュニケーションを学ぶ。

プロジェクトリーダー	宮崎晃弥	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	木下雄介	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	東竜次郎	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	上馬庭和也	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
広報リーダー	久保裕子	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
会計リーダー	林田悠里	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
参加人数 33名				

通年

「防犯ボランティア」に協力

■ 熊本キャンパス・ショッピングセンターCOCOSA(熊本県熊本市)

熊本県警より本学が委託を受け、インターネットなどサイバー空間上の有害、違法情報のパトロールやサイバー犯罪被害防止のための教育活動や広報活動などを行うものです。4月20日の「サイバー防犯ボランティア団体交付式」を皮切りに、7～12月まで月1回程度、違法なサイトを探し出す作業を行いました。12月14日にはショッピングセンターCOCOSA前の歩道において、サイバー防犯を市民に伝えるチラシ配布にも協力しました。



4月23日

「光を照らそう!～笑顔いっぱいものづくり教室～」を開催

■ 益城町立益城中央小学校(熊本県上益城郡)

熊本地震で被害を受けた益城町の子どもたちの笑顔に光を照らしたいという思いから、「光」をテーマとして小学3～6年生を対象に開催。児童27名と保護者15名が参加しました。当日はブース形式でイベントを実施。LEDランタン・光るスライム・万華鏡・ステンドグラス・芳香剤などの作り方を子どもたちに教えました。またLEGOロボット操縦やミニドローンのデモフライトなど、参加者全員が楽しんでもらえる企画も行いました。



6月9日、10月4日

「天体観測」を実施

■ 熊本キャンパス1号館屋上

本学宇宙情報センターにて観測活動を続けていましたが、熊本地震により同センター天文台が大きな被害をうけたため、熊本キャンパスに観測場所を移して活動を継続。6月9日は「ストロベリームーン」と呼ばれる今年1年で地球から最も離れ、一番小さい満月が見られることより、本学学生にも特別な現象の月を見てもらいたい、と呼びかけ16名が参加しました。10月4日は中秋の名月に合わせて企画し、計17名が参加しました。



6月10日、6月24日、7月8日・23日

「ロボットサマースクール2017(全4回)」をサポート

■ 本学付属熊本星翔高等学校(熊本県熊本市)

自律型ロボットの組み立てから走行までの体験を通じて「ものづくり」の楽しさを伝えよう、特定非営利活動法人HITOプロジェクトが主催となり計4回実施。プロジェクトメンバーは運営をサポートしました。1回目は、小学生34名が参加。ロボット教材「レゴ®マインドストーム」を用いて自律型ロボットを製作し、制御の仕組みを学びました。2回目は専用ソフトでプログラミングの基本を学び、3回目はプログラミング技術を習得。4回目は競技コースにもチャレンジしました。



6月10日、9月9・29日

球磨村をドローンで撮影

■ 球磨村役場(熊本県球磨村郡)

球磨村役場より依頼を受け、ドローンを活用した球磨村の空撮を行いました。6月は苗の緑が映える田植え直後を、9月は実った稲が風に揺れる稲刈り直前を記録し、美しい球磨村の自然をPRする映像制作に協力しました。撮影にあたり、メンバーは村のどこを記録するか村役場と打合せを重ねるとともに、撮影後はすぐに映像を確認してもらいながら、村の方々のニーズに応えられるよう取り組みました。



9月24日

「ETロボコン九州北地区大会」で準優勝

■ 九州産業大学(福岡県福岡市)

自立走行する機体のプログラミング技術を競う本大会にメンバー14名がデベロッパー部門プライマリークラスに参加。今回は開発チームを分けたことで情報共有がうまくいかず、基本走行・難所の進捗状況が把握できない事態が起こり、わずかな差で準優勝となりました。また、より上級のアドバンスクラスにも出場しましたがリタイアとなり、結果を残すことができませんでした。



メカトロマイスタープロジェクト

熊本・阿蘇
ものづくり

技術の融合から新しい社会を考える

達成目標 ソーラーカーレース及びレスキューロボットコンテストで上位入賞

学びのテーマ 新マシンの製作・改良を通してPDCAサイクルに基づいたチームマネジメントを行い、その中で個々の仕事に対する責任意識を高める

プロジェクトリーダー	堀青蓮	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	新山友宏	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
サブリーダー	松窪健勝	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
広報リーダー	高木悠成	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
会 計	古川貴博	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
				参加人数 31名

8月8~11日
「2017ワールド・グリーン・チャレンジ」に出場
■ ソーラーカーレース(秋田県大湯村)

熊本キャンパスのチームとして13年ぶりの出場となった本大会は、メンバー9名とアドバイザーの清田英夫教授(基盤工学部電気電子情報工学科)、佐松崇史教授(同)ら教職員3名が現地入り。『Tokai Nextage』を改良したマシンで計24時間を走り切り、総合2位、ソーラーカーアドベンチャークラスでも2位に入りました。



8月9日
「世界一行きたい科学広場in熊本2017」に参加
■ 熊本キャンパス

“子どもたちに科学の魅力やものづくりのおもしろさを伝える”ことを目的にTo-Collaboプログラムの大学推進プロジェクトの一環として実施し、約3200名が来場。子どもたちでも操作しやすいロボットを展示しました。先端技術コミュニティACOTもふりふり発電機の製作体験ブースを出展しました。



6月25日
「レスキューロボットコンテスト大阪予選」に出場
■ 大阪府立北大阪高等職業技術専門学校(大阪府枚方市)

大規模都市災害における救命援助活動を題材としたコンテストで、多くの方々に防災や災害対応について関心を持っていただくことを目的として開催され、倒壊した家屋を模したガレキなどがある実験フィールド上の人形を、ロボットを遠隔操作して救出し、ロボットの性能や操縦技能などを競います。本プロジェクトは、第1競技に参加するも、2号機の無線通信のトラブルに見舞われ、要救助者を模した人形を救えず、総合10位という結果に終わってしまいました。



熊本地域プロデュースプロジェクト

熊本・阿蘇
地域活性

熊本の街をブランディング・外部への発信

達成目標 ①地域交流及び魅力発信のためのイベントを年4回実施 ②地域の魅力を発信するためのフリーペーパーを年2回発行 ③着地型観光論の実践を行う

学びのテーマ 地域の魅力発信のノウハウを学びつつ活かす

プロジェクトリーダー	高橋一央	経営学部 観光ビジネス学科	3年	
サブリーダー	梶谷誠史	経営学部 観光ビジネス学科	3年	
サブリーダー	樋口慎哉	経営学部 観光ビジネス学科	3年	
広報リーダー	梶谷誠史	経営学部 観光ビジネス学科	3年	
会 計	伊藤玲羅	経営学部 観光ビジネス学科	2年	
				参加人数 31名

6月4日
水越ナイトウォーク
■ 旧御船町立水越小学校(熊本県上益城郡)

ゲンジボタルの鑑賞を通じて、地域の自然の豊かさを感じてもらおうと同時に、地域住民との交流を通じて地区の魅力を知ってもらおうと企画。里山を知らない街中に住む子どもたちに魅力ある風景を将来に残したいと2年ぶり2回目の開催となりました。当日は西原小学校4~6年生と保護者計9名が参加し、バスを運行。車内ではビンゴなどのレクリエーションを実施しました。ナイトウォークでは地元の住民グループ「水越地域活性化協議会」の方にホテルについての説明やガイドをしていただきました。



12月16日
「親子で楽しむ!クリスマスパーティー」を実施
■ 熊本キャンパスシエスタ

ものづくりの楽しさを知ってもらおうと、クリスマスシーズンに合わせて先端技術コミュニティACOTと共に開催しているもので、地域の小学生とその保護者ら53名が参加。熊本市古町のキャンドルハウスさんからキャンドル作りの職人をお招きし、ワークショップを行いました。当日は、簡単なゲームなどでアイスブレイクを行った後、小学生が作業に戸惑わないようにメンバーが各テーブルに付いてサポート。他にもメッセージカード作り、ミニリース作り、LEGOロボット、VR体験などを行いました。



阿蘇援農コミュニティプロジェクト

熊本・阿蘇
社会貢献

農業の実態を学び、発展を考える

達成目標 農家さんの作業負担の軽減をはかると共に、大学と地域のつながりの強化、そして学生が農業についてさらなる理解をし、知識と技術を体得する
学びのテーマ 学生一人ひとりが自ら考え、行動し、農作業の知識と技術の体得と、農業の発展について考え共有・発信する

プロジェクトリーダー	藤川志津香	農学部	応用植物科学科	3年
サブリーダー	林風笑	農学部	応用動物科学科	3年
サブリーダー	足立潤	農学部	バイオサイエンス学科	3年
広報リーダー	佐山美優	農学部	応用動物科学科	3年
会 計	長尾薫乃	農学部	応用植物科学科	3年
				参加人数 164名

通年
援農活動を実施
■ 阿蘇地域

“農業を手伝いながら農業の生きた知識や技術を習得するとともに、農業や農家の現状について学ぶ”ことを目的として、一年を通じて阿蘇地域の農家の支援を行いました。4月は4件の農家でビニールハウスの修繕や田植えの準備・イチゴのバック詰めを行いました。5月は大型連休や週末を利用し、9件の農家を訪問。カモミールの花の収穫やブドウの花切り、アスパラガスやタマネギ、ジャガイモの収穫、トマトの定植などを行いました。夏の援農では、各地区の農家を8月9日~9月18日まで4日間から8日間の日程で計5回実施。現地に滞在しながら、花苗の植え替えや間引き、種まきなどの管理作業や農作物の収穫に取り組みました。9月・10月はイチゴの苗配り、定植や除草、ブドウの剪定などを行い、11月はサツマイモ農家で「シルクスweet」と「紅はる

か」の収穫と出荷のための選別作業やブドウ、ハラペーニョの収穫、ハーブ畑の除草、カモミールの鉢上げなどを実施。12月16日はメンバー4名が畝にビニールをかぶせ、間隔を開けて土を被せる「サトイモのマルチ張り」やサツマイモの箱詰め、ダイコンとハクサイを収穫しトラックの荷台へ運びました。1月7日は南阿蘇村のアスパラガス農家で枯草の刈り取りや支柱抜きを実施。1月20・21日は6名のメンバーがスキの苗の移動や苗を置いていた台の解体、組み立てやヒノキ、コナラ、スキの苗木抜きを行いました。2月17日は5名のメンバーがコンテナ約46箱分のサトイモの収穫と親芋から子芋を外し、コンテナにまとめる作業を行いました。



6月17・18日
「農創生会議イベント」に参加
■ ハウステンボス(長崎県佐世保市)

九州全域に存在する農業コミュニティ同士のつながりの強化と発展を目指した会議で、本プロジェクトからは2名が参加し他県の農業団体と交流および援農のPRを行いました。1日目は4名でグループを組み、写真撮影場所を見つけ、集合写真を撮影するという課題に取り組み、他県の団体との仲を深めました。その後「農業と将来のビジョン」について講演を聞きました。2日目は微生物による土づくりをし、有機野菜を栽培している菌ちゃんファームにて、農家さんからお話を伺い、農場見学を行いました。さらに、九州の各団体の活動紹介があり、各々の農業へのビジョンを話し合いました。



8月24日
「くまもと食・農ネットワーク総合・研修会」で発表
■ ホテル熊本テルサ(熊本市中央区)

“「食」と「農」の結びつきを強める”ことなどを目的に、熊本県内で地産地消に関する活動に携わる市民らの団体「くまもと食・農ネットワーク」と熊本県が主催しているものです。本プロジェクトはメンバー3名が参加し、約15分ほど援農についての目的や意義、震災による活動の影響について発表。また、本学農学部のプロジェクトの発表、山田牧場の方の西原村の復興に関する発表や、いきものと共生する熊本農業の発表も行われました。



11月4日
「第6回食と農林漁業大学生アワード」で農林水産大臣賞を受賞
■ 丸の内マイプラザ(東京都)

“「食」と「農林漁業」を通じた地域の再生に向けて、大学生の相互の研鑽と連携の強化を促進する”ことを目的として実施され、全国から9つの学生団体が参加。本プロジェクトは、熊本県阿蘇地域を中心に人手不足に悩む農家の農作業を手伝い、交流を深めてきた活動の内容を発表。また熊本地震で被災した農家の復旧作業にも協力したことなどを報告。決勝大会にて、「農林水産大臣賞」を受賞しました。



あにまるれすきゅープロジェクト

阿蘇・湘南

環境・動植物保護

1匹でも多くの捨て犬・猫の命を救う

達成目標 殺処分される犬や猫たちを少しでも減らす

学びのテーマ 熊本市以外の地域でも殺処分を少なくするために自分たちが何をすべきか学ぶ

プロジェクトリーダー	今井裕之	農学部	応用動物科学科	3年
サブリーダー	松本和馬	農学部	応用動物科学科	3年
サブリーダー	山上沙也	農学部	応用動物科学科	3年
広報リーダー	則直孝洋	農学部	応用動物科学科	3年
会 計	岡本恭潤	農学部	応用動物科学科	3年
				参加人数 50名

11月19日

「譲渡会」をサポート

熊本市内

保護された犬猫の里親を探すことを目的に、動物愛護団体フィリアが主催するもので、本プロジェクトは「外部への発信、譲渡会の存り方、譲渡会への来場者数を増やす」ことを目的にサポート。14名のメンバーは散歩、会場設営、里親への説明（譲渡会の意義、犬および猫の譲渡を受けるための条件や犬猫の性格、体調など）を行いました。



11月26日

「熊本市東区民まつり2017」に参加

熊本市東区役所(熊本県熊本市)

「動物愛護や正しい飼育法、伴侶動物をそばに置くということの重大さなどについて多くの人に知ってもらい理解してもらうこと、またそれを推進伝達している団体を認知してもらう」ことを目的に初参加しました。サポートを行ったブースには約50名が来場。メンバーは、動物愛護のパネル展示、迷子札の作成などを行いました。



2018年2月7日

「さくらんぼ保育園」を訪問

さくらんぼ保育園(熊本県熊本市)

ペットを飼うことの重大さや責任について学んでもらうため、保育園の訪問を行いました。当日は園児約20名が参加。捨て犬や捨て猫が日本でどれほど殺処分されているかを〇×クイズで出題。その後、迷子札の重要性について紙芝居を使い園児にもわかりやすいように説明。災害時に行方不明になった場合、誤って殺処分されてしまわないように迷子札が推奨されていることを伝えました。



阿蘇は箱舟プロジェクト

阿蘇・湘南

環境・動植物保護

希少野生生物保護の最前線

達成目標 阿蘇地域における希少な生物たちの棲みやすい環境をつくる

学びのテーマ 保全活動を通じて広報活動、計画力の重要性を学ぶ

プロジェクトリーダー	井手脩人	農学部	農学研究科 農学専攻修士課程	1年
サブリーダー	古賀存	農学部	応用植物科学科	4年
サブリーダー	伊東玲奈	教養学部	人間環境学科自然環境課程	4年
広報リーダー	本田将大	農学部	応用植物科学科	4年
会 計	植田康太	農学部	応用植物科学科	4年
				参加人数 84名

4月、5月、6月4日、9月23日

「希少植物保護のためのパトロール活動と除草作業」を実施

熊本県阿蘇郡南阿蘇村

熊本県の特定希少野生動植物に指定されている蝶「オオルリジミ」をはじめ、阿蘇の自然に生息する希少な動植物保護を目的として行っているものです。4月と5月の休日を利用してのパトロール活動には、のべ34名のプロジェクトメンバーが参加。阿蘇の3ヶ所の草原でパトロールを実施しました。参加したメンバーは草原を歩きながら双眼鏡を用いてパトロールを行い、実際にオオルリジミを観察することもできました。6月4日には36名のメンバーが「水源の森林ボランティアネットワーク」と協力して「熊本県野外劇場ASPECTA」において、セイタカアワダチソウをはじめとする外来植物を刈り払い機や大鎌を用いて除草作業を実施。3ヘクタールの草原をオオルリジミが生息するのに十分な環境を整えることができました。プロジェクトメンバーの古賀存さん(農学部応用植物科学科4年次生)は「自分たちがオオルリジミの保護に役立っていると感じた活動でした。今後もしっかり活動していこうと思います。」と語り、同メンバーの滝浦広輝さん(農学部応用植物科学科3年次生)は「オオルリジミ以外の昆虫も阿蘇の高原に数多く存在していることを知ることができました。地震が起きても生物たちはその場所で絶えず生きており嬉しいと感じました」と語りました。



札幌ボランティアプロジェクト

札幌

地域活性

ボランティアを通じて、一回り大きな自分になる

達成目標 除雪作業のボランティア活動を中心に、社会貢献や地域貢献に尽力を注ぐ

学びのテーマ プロジェクト活動を通して安全安心な街づくりに貢献し、地域の方々とのコミュニケーションを図り社会性を学ぶ

プロジェクトリーダー	藤盛将仁	国際文化学部	国際コミュニケーション学科	3年
サブリーダー	網田瑞希子	国際文化学部	国際コミュニケーション学科	3年
サブリーダー	小林茜莉	国際文化学部	デザイン文化学科	3年
広報リーダー	小川夢未	生物学部	海洋生物科学科	2年
会 計	成田悠哉	国際文化学部	地域創造学科	2年
				参加人数 72名

5月13日、7月8日

「花壇の除草作業ボランティア」に参加

南沢旭台町内会(札幌市南区南沢)

キャンパス近隣の南沢旭台町内会が主体となり、毎年定期的に行っている活動の協力依頼を受け、本プロジェクトは「地域と密接したボランティア団体として地域の方々との交流を図る」ことを目的に2015年から参加。プロジェクトメンバーと約100名の町内会の方々と共にキャンパス周辺約200mにわたる同町内会の花壇整備や、除草作業を行いました。



9月17~21日

「壁塗り」を実施

札幌キャンパス2階談話室

「壁を塗ることで部屋の印象を明るくし、学校環境をより良くすることで、本プロジェクトの知名度を上げる」ことを目的に、校内でも特に汚れや落書きが目立つ2階談話室の壁塗りを4回にわたり実施。地域の方やデザイン文化学科の学生に協力をいただき、机・椅子の移動、下地清掃、壁と床の養生、ペンキ塗り、サンドペーパー磨き、室内清掃を行い完成。談話室の雰囲気は以前に比べてとても明るくなり、本プロジェクトの知名度もあがりました。



6月4日

「第46回いちご豚肉まつり」に参加

豊浦海浜公園(北海道虻田郡豊浦町)

豊浦町と本学は2007年に「地域総合交流協定」を締結しており、教育研究活動を通し同町との交流を進めていく一環として、学生や教職員が毎年サポートしているもので、本プロジェクトも参加。当日は雨模様でしたが、メンバーや有志の学生20名と教職員10名が、実施委員の方々と一緒に、会場ステージ周辺のテーブルなどの片付けを行いました。会場は、多くの人々で賑わい恒例の餅まきで盛況のうちに終了しました。



12月4日

「除雪出陣式」を開催

札幌キャンパス

キャンパス周辺の町内会会員から除雪を希望する世帯を募り、自力での除雪が困難な世帯を対象に除雪ボランティアを展開しています。出陣式ではアドバイザーの大形利之教授(国際文化学部)がプロジェクトの経緯や活動理念を説明。続いて網野真一札幌キャンパス長が激励しました。その後リーダーの藤盛将仁さん(国際文化学部3年次生)が「困っている方にこちらから積極的に声掛けをして、きめ細かい心配りをしながら除雪活動を行います」と決意表明をし、最後に札幌市南区土木部長佐々木真一様より除雪用具の貸与を受けました。



7月2日

「パークリング大会」をサポート

南の沢小学校(札幌市南区南沢)

昨年に引き続き2回目の協力となる本大会は、本学札幌キャンパスが立地する旭台の町内会より依頼を受け、本プロジェクトの「地域貢献に尽力する」とする活動目的のもと参加しました。当日はメンバーら5名が審判を務めるなどのサポートを行い、当日は南の沢地区にある13チームと大会役員からなる1チームが参戦。150名の地域の方々が交流するとともに、運動不足を解消し健康増進を図りました。



12月4日~2018年2月12日

「除雪活動」に出動

札幌市内

10年目を迎えた今年度は69名が参加。メンバーたちは昨秋から各戸を訪問して世帯主と面談し、除雪が必要な場所についてカルテを作成。少人数でも効率的な除雪が行えるような対策を立てて冬に備えてきました。今年の札幌は降雪があってもすぐに溶けてしまうことが多く、例年よりも出勤回数は減少しましたが、8回にわたって延べ19世帯に出動。メンバーで協力し合い降り積もった雪と格闘しました。



ユニークプロジェクト活動報告

【湘南キャンパス】

Egyptian Project

学内にある古代エジプト及び中近東コレクションの調査・記録・修復・保存を行う。

きらきら実験教室

子どもたちにもつくりの楽しさを伝え、理科に対する興味・関心を引き出すための企画を実施する。

★Connect

秦野市内の子どもや若者が、「人と人、人と社会と繋がり、自分らしく生きていく」ことを支援する。

★Sunflower

遊びを通してカンボジアの子どもたちと交流し、現地の初等教育の現状や必要物資の調査を行う。

★Chapture The Flag in Tokai (CTFT)

サイバー犯罪やサイバー攻撃の問題に対応するためのセキュリティー技術を習得し、高校生たちに普及させる。

Tokai Dream Space Team

高校生や大学生、社会人との連携で、挑戦と信頼性のバランスを重視したものづくり体験イベントを開く。

東海魅力宅配便

大学生活での経験や学びを他学生へと発信・共有していくことで東海大学の魅力を知ってもらう。

ポリヘドロン工作隊

多面体工作を通して幾何学や数学、構造学に対する興味関心を引き出し、参加者の創造力を養う。

【代々木キャンパス】

よよさんぽ

学生や地域住民の参加型イベントを企画・実施するとともに、代々木キャンパス周辺の魅力を発信していく。

【高輪キャンパス】

ロボP

技術力向上を目指しつつ、楽しく情報通信技術を学んでもらえるようなイベントを開催する。

【清水キャンパス】

NT (Near threatened) 回復プロジェクト

調査海域に生息するサンゴ群体の生息位置、サンゴ同士の位置関係、サイズ、種類確認などの調査を実施する。

★商品開発プロジェクト

清水区が日本一の水揚げ量を誇るサクラエビやマグロ類を用いて地産地消・地域活性化につなげる。

三保活性化プロジェクト

三保半島を中心とした地域の人々と積極的に交流し、地域活性化に貢献する。

ワンダフル・マリニアニマルズ

海洋生物型ロボットを製作し、講演や出展を積極的に行うことで、海洋生物に対する興味を持ってもらう。

【清水・湘南キャンパス】

気仙沼シャークプロジェクト

日本一の漁獲量を誇る気仙沼のサメに商品としての付加価値をつけ、気仙沼に暮らす人々の生活再建支援を検討する。

【熊本・阿蘇キャンパス】

★Action marketingプロジェクト

若者の視点に立ったマーケティングによる課題解決の課程で、東海大学の教育目標である4つの力を身につける。

阿蘇復興への道

～未来へつなげ 東海大学生の希望～

阿蘇キャンパスと周辺の学生村の繋がりを守るために、イベントや観光PR動画を作成し、地域活性化を促す。

★動植物園プロジェクト

熊本市動植物園と大牟田市動物園で案内板の設置やボランティアガイドを行い、若者らを動物園に呼び戻す。

【札幌キャンパス】

札幌ビオトープをつくらう会

グラウンドへの融雪水の流出阻止、エゾサンショウウオの産卵・孵化促進などのために、敷地内のビオトープを活用する。

地域連携プロジェクト

地域の方々と一緒に、地域交信カフェ「Three Café」の運営など、地域活性化のための活動を企画・実行する。

★は今年度新規プロジェクト

8月19・20日

ポリヘドロン工作隊が「青少年のための科学の祭典大阪大会・サイエンスフェスタ2017」に出展

■ハービスHALL(大阪府大阪市)

“子供たち・若者の「理科離れ」を克服して、理科好きの子供たち、若者、両親を育てる”ことを目的とし、2015年より毎年、参加しています。イベント両日で22000人が来場し、本プロジェクトの工作教室は3回行われ、希望者の中から抽選で選ばれた約180名の子どもたち、保護者らが訪れました。当日は、活動テーマである「多面体工作を通じ様々な人に科学への興味・関心を持ってもらうこと」を広めるため、五方十二面体の工作教室を企画。4名のプロジェクトメンバーと本学付属仰星高校教諭と高校生1名の計6名が出展スタッフとして、そのサポート対応にあたりました。



9月10・24日、10月1日、11月26日

Tokai Dream Space Team が「Intelligent Water Rocket Competition 2017」を開催

■湘南キャンパス

“高校生・高専生・大学生、および社会人にもつくりの魅力”を伝えるために、模擬人工衛星を搭載した全長約1mのペットボトルロケットを製作してもらい、打ち上げるコンペティションとして実施。9月10日は開会式と協賛企業の講演、協議説明、9月24日はITO講習(開発講習会)、10月1日はS&M講習会を行いました。11月26日の大会当日は、プロジェクトメンバーは打ち上げを補助しながら、会場でのアナウンスなどの進行を担当。ペットボトルロケットが打ちあがるたびに、会場は歓声に包まれていました。



11月3日

東海魅力宅配便が「海外研修航海の展示会」を開催

■湘南キャンパスコムスクエア1階

同窓生が集う「ホームカミングデー」の会場にて、展示会「航海してきたが後悔していない～第48回海外研修航海で身につけた力～」を開催しました。「海外研修航海」は、本学の所有する海洋調査研修船「望星丸」を利用して南太平洋や東アジアを巡る研修プログラムです。これまで49回行われており、3000名をこえる学生が参加しています。展示会では、100名近くの来場者があり、第48回海外研修航海における写真やさよならパーティーのビデオ上映など行いました。

湘南



7月1日

よよさんぽが「富ヶ谷二丁目夏祭り」の企画・運営に協力

■代々木キャンパス正門内・東海大学通り

昨年まで富ヶ谷二丁目町会が本キャンパス正門付近で開催していた「納涼祭」を、地域住民と学生との多世代交流を深めるイベントにしようと、今年初めて企画・運営に協力。メンバーをはじめとする学生約100名と教職員が参加しました。正門内にかき氷、焼きそば、ヨーヨー釣りなどの屋台を設け、東海大学通りでは「ラダーゲッター」や「ポッチャ」などのニュースポーツができるブースを設置。当日は大勢の近隣住民が参加し、無料配布のお菓子や風船があっという間になくなるほどの大にぎわいとなりました。

代々木



11月16日

地域連携プロジェクトが高齢者福祉施設に出向き「出張カフェ」を開催

■HACC石山(札幌市南区)

“地域の魅力の「発信」と利用者同士または学生との「交流」”を目的として、店舗を借りて「スリーカフェ」を運営。今回の取り組みは、本店舗に来ることが難しい方々の所に出向くことで、本プロジェクトの目的をさらに達成しようとするものです。当日は、いつもカフェを練習の場として活用してくださっている「民謡サークル」のみなさんと、『ミニライブ・出張カフェ』のコラボレーション・イベントを実施。のべ30名強が来場し、音楽と香り豊かなコーヒーと、若者とのコミュニケーションを楽しみました。

札幌



12月27日

三保活性化プロジェクトが「子どもわくわくランド」を開催

■折戸生涯学習交流館(静岡県静岡市)

“地元の小中学生と交流をもつことにより、地域との連携を深め盛り上げる”ことを目的に、2015年度から行っているもので、本学公認団体の水族応用生態研究会、JAZZ研究会、大道芸サークル「TRICK-ARTS」の学生も参加し、イベントを盛り上げました。当日は、『門松つくり』の工作体験を実施したほか、水族応用生態研究会は三保半島界隈から採取した生物の展示や海の生き物に直接触れることができる「タッチプール」を行いました。昼食後には、JAZZ研究会による生演奏、TRICK-ARTSによるジャグリングなども披露され、参加した約59名の小学生とともに楽しみました。



2018年1月21日

阿蘇復興への道が「南阿蘇大復興祭」を開催

■久木野総合センター(熊本県阿蘇村)

熊本地震からの復興支援活動に取り組むメンバーが中心となって、南阿蘇村と学生の繋がりを後世に伝えるために開催。当日は、黒川地区の住民と学生と一緒に作った「のっぺ汁」や「高菜めしおにぎり」などを無料配布しました。またステージでは、アーティストの片平里菜さんやThe Low-Atusが歌を披露し、会場を盛り上げました。

阿蘇・熊本



DAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクト

プロジェクトリーダー
■ 横堀 美咲
体育学部
生涯スポーツ学科 4年次生

詳しい活動報告は
P9



チャレンジプロジェクトになった4年目の今年も、数々の活動を行ってきましたが、最も印象に残った活動は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会主催「東京2020学園祭」への出演です。メンバーのほとんどがダンス初心者でありながらも、アドバイザーである田巻先生や中村先生、コーディネーターの三橋さんのご指導のもと、毎日のように練習を繰り返し、迎えたイベントだからです。そこで「ベストパフォーマンス賞」という光栄な賞をいただいたことは、たくさんの方に私たちの活動を知ってもらえるきっかけとなりました。また、今までパフォーマンス団体を「支える」活動が多かった私たちにとって、自らパフォーマーとしてステージに立つ経験は、身体表現の楽しさを再認識する大変貴重な機会となりました。さらに、このイベントへの出演をきっかけに、学内で行われた「バスケットボール連盟リーグ戦のヘアタイムショー」や「建学75周年記念トークショーのオープニングセレモニー」への出演依頼をいただき、より多くの人に身体表現の楽しさを伝えることができました。このような素晴らしい経験ができたのは、活動を支えてくださった教職員の方々や先輩方など、多くの人との繋がりがあったからです。これからも、“人との繋がりを”を大切に、身体表現を通して「する(踊る)」「観る」「支える」ことの楽しさを地域・社会へと伝えていく団体として日々成長していきたいです。



「東京2020学園祭」でベストパフォーマンス賞を受賞

メカトロマイスタープロジェクト

プロジェクトリーダー
■ 堀 青蓮
基盤工学部
電気電子情報工学科 3年次生

詳しい活動報告は
P21



ソーラーカーやレスキューロボットを製作してレースやコンテストに挑むこと、ものづくり講習会やロボット教室などの社会貢献活動を行うことで、自らの知識や技術の習得、鍛錬を目的に活動しています。2017年度はソーラーカーチームにとって大きく躍進した年度となりました。昨年完成した新型ソーラーカー「Tokai Nextage」を改修し秋田県大潟村で開催されたワールドグリーンチャレンジに挑みました。大会に参加するにあたり、配線の全交換や足回りの組み直しなど車体の改修作業を行いました。特に大会前の大きな作業となったのはソーラーカーの空力性能に関わる部品を取付けることです。このことで、走行性能も上がり、大会では総合で準優勝、クラス別でも準優勝を獲得することができました。今回の受賞はひとえに地元企業の方々や大会運営、他チームなど多くの皆様の温かいご支援のおかげです。また、なにより入賞を目指して一所懸命にチーム一丸となって頑張ってくれたメンバーたちの努力の結晶だと実感しました。11月に開催された建学祭では秋田レースでのピットを屋外で完全再現し、搭乗体験やVR走行体験などのアトラクションを用意しました。いずれの催しも来場された多くの方に観覧、体験いただき、ソーラーカーチームの活動をより知ってもらえる良い機会となりました。また、ロボット教室をはじめ多くのイベントを開講し、ロボット工学分野に興味を持って頂ける様、地域貢献活動を行うことができました。



ワールドグリーンチャレンジに挑戦

3.11生活復興支援プロジェクト

プロジェクトリーダー
■ 杉山 愛
政治経済学部
経営学科 2年次生

詳しい活動報告は
P14



東日本大震災から7年が経ちました。当時中学1年生だった私は、被災地のために何かしたいと思いつつも、実際に行動することはできませんでした。しかし東海大学に入学して、「持続可能な開発のための復興支援」という活動理念を掲げ、地域に根付いた復興支援を目指すこのプロジェクトの存在を知り、活動に参加することを決めました。私が初めて東北を訪ねたのは大学1年生の7月です。その時初めて私は、震災から時間が経っているにもかかわらず、復興がまだ終わっていない被災地の姿を見ました。そして、2年生になってプロジェクトリーダーになり、より活動に熱心に取り組むようになりました。夏休みには、8月上旬に岩手県で子供たちを対象にした電子工作教室を行い、中旬には宮城県で昨年度建てた集会所のウッドデッキ建設を行い、下旬には再び岩手県に戻って「結の道」という遊歩道の整備を行うために約一か月間東北に滞在しました。活動をする中で、地域の方から「いつも来てくれてありがとう」「学生が頑張っているから私達も頑張れる」という言葉をいただけたことで、困難も乗り越えることができました。日本では現在、熊本地震や九州豪雨をはじめとする自然災害が身近に存在し、復興支援は欠かせないものになっています。そのため、今後も地域の自然や文化、伝統を尊重した復興支援に貢献できる活動を続けていきたいと思っています。



“結の道”の整備

阿蘇援農コミュニティプロジェクト

プロジェクトリーダー
■ 藤川 志津香
農学部
応用植物科学科 3年次生

詳しい活動報告は
P22



はや1年が経過した熊本地震は、活動拠点であった阿蘇校舎に甚大な被害を与えました。当時、一時活動停止状態となりましたが、地震から3ヶ月後に熊本校舎へと拠点を移して活動が再開されました。本プロジェクトは、農学部の校舎のあった阿蘇地域の農家さんのお手伝いをする中で、農家さんの農作業負担の軽減と実体験から生きた農業のノウハウを得ることが目的です。とにかく農業の現状を知ろうと、震災後も阿蘇地域の農家さんとの繋がりを絶やさず援農活動を行うことを大切にしてきました。それこそが活動の本質ですが、今年度は新たな取り組みによって、“知る活動”から“伝える活動”にステップアップできた1年でした。九州の農業系学生団体との交流や、熊本復興支援プロジェクトとの共同援農活動など、本プロジェクト以外との繋がりが持つことができました。その繋がりが「第6回食と農林漁業大学生アワード」を知り、大切な農家さん方のリアルな声を少しでも届けたいという思いで参加し、最優秀賞である「農林水産大臣賞」をいただくことができました。これは、農家さんと離れていても家族のような、本プロジェクトにしかない繋がりがあっての受賞です。プロジェクトの規模や知名度も着実に拡大しており、来年度は発足10年という節目を迎えます。繋がりを貴ぶこの活動の本質を曲げず、さらなる発展を目指す不易流行こそが地域を元気にする本プロジェクトに必要なことだと感じます。



毎夏うかがっている、産山村の皆さん

2018年度 第1回現代教養センターFD研究会 2018年度新カリキュラムに向けた「発展教養4科目」の内容確認と理解

日時：2017年7月26日(水) 17:00～18:00
場所：東海大学湘南キャンパス 15号館 5階 第3共同研究室
人数：30名(センター所属:20名+他所所属:10名)

概要

2018年度新カリキュラムに向けた教育内容を検討し発展させることを目的とし、「発展教養科目」の内容についてガイドブックを元に4名の先生にご講演をいただきました。「シティズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」の4科目の内容をそれぞれの担当者が説明し、参加者全体と確認を行いながら理解を深めました。各科目ではシラバスの全体像の確認、アクティブラーニングの取り入れ方、評価方法などが紹介されました。本年度既に試行が行われている「国際理解」では、準備の状況や問題点等に関して具体的な報告が行われました。参加者との質疑応答の中で、これらの4科目は半期で教員が入れ替わる特性や、授業回数の変更についての対応等が必要であることを含めて、各科目で実践に向けての検討課題が明らかになったと考えられます。最後にセンター所長より、これらの4科目はチャレンジングな科目構築と共に大学が掲げる中期目標の項目に近づいた内容のカリキュラムとなっており、今後のFD活動を通じてより良い現代教養科目の構築を目指したいとご挨拶をいただきました。

- [講演1] 「シティズンシップ」科目について
現代教養センター 大江一平准教授
- [講演2] 「ボランティア」科目について
現代教養センター 田島祥講師
- [講演3] 「地域理解」科目について
現代教養センター ニノ宮リムさち准教授
- [講演4] 「国際理解」科目について
国際教育センター 村上治美教授



2017年度第2回現代教養センターFD研究会 議事録 2018年度新カリキュラムに向けた「発展教養4科目」の内容確認と理解

日時：2017年11月15日(水) 17:00～19:00
場所：東海大学湘南キャンパス 15号館 5階 第3共同研究室
人数：23名(センター所属:21名+他所所属:2名)

概要

2018年度新カリキュラムに向けた教育内容を検討し発展させることを目的とし、「基礎教養科目」の内容について、ガイドブックを元に4名の先生からご講演をいただきました。「基礎教養科目」全体としての理念や目標等をふまえた上で、「人文科学」「社会科学」「自然科学」の3科目の内容をそれぞれの担当者が説明しました。特に「基礎教養科目」全体の講演に対する質疑では、参加者から成績評価に対する問題提起が行われました。教養3科目の説明の後、センター所長より、新カリキュラムにおける基礎教養科目が抱える問題や経緯を、今後も学部・学科の教員間において理解を高めていただくような努力を行っていき、とご意見をいただきました。その後、各科目部会に分かれて討論が40分ほど行われ、それぞれの科目担当者間において内容の理解が深められました。

- [講演1] 「基礎教養科目」について
現代教養センター 前田泰樹教授
- [講演2] 「人文科学」について
現代教養センター 加藤次直准教授
- [講演3] 「社会科学」について
現代教養センター 田中彰吾教授
- [講演4] 「自然科学」について
現代教養センター 佐藤恵子教授
- [各科目部会]



シンポジウム「シティズンシップ育成をめざす教育改革 ～東海大学におけるパブリック・アチーブメント型教育の挑戦～」

日時：2017年11月27日
場所：東海大学湘南キャンパス Techno Cube 19号館
人数：130名

概要

代々木、高輪、清水、伊勢原、熊本、札幌の各キャンパスにもテレビ会議システムを用いて発信し、当日は各キャンパスの教職員や学生ら約130名が参加しました。開会にあたり山田清志学長が挨拶し、続いて筑波大学人間系教授の唐木清志氏が「シティズンシップ教育の今」をテーマに基調講演を行いました。シティズンシップ教育やサービスラーニングを専門とする唐木氏は、社会参加を通して市民性を育成する手法を解説したほか、現代教養センターの木村英樹所長(工学部教授)が、本学で実践してきたPA型教育の取り組みとその狙いについて講演。その後、パネルディスカッションには、健康科学部社会福祉学科の稗田里香准教授と

国際教育センターの西川恵准教授、現代教養センターの堀本麻由子准教授、唐木氏が登壇。地域連携センターが昨年度発行した「TOKAI CITIZENSHIP WAVE」でPA型教育を活かした実践的な授業の事例を紹介した稗田准教授と西川准教授は、取り組みの内容とその後の成果などについて発表しました。



チャレンジセンターの活動

リーダー研修会

キャンパスをこえたプロジェクト学生同士の交流および「プロジェクトリーダー」の育成を通じて、プロジェクト活動を活性化することを目的に実施。今年度は5キャンパスの学生40名が一堂に会しました。

2018年 2月19日～21日 「2017年度チャレンジセンターリーダー研修会」を実施

- 目的** : キャンパスを超えたプロジェクト学生同士の交流、およびプロジェクトリーダーの育成を通じて、プロジェクト活動を活性化する
- ねらい** : プロジェクトメンバーとしてメンバーを統率し、プロジェクト目標を達成するために必要な力を学ぶ
- リーダーとしての課題を捉え、リーダーシップとは何かを考える
 - リーダーに必要なスキルとして、ファシリテーションを学ぶ
 - リーダーとしての目標を考え表明する
- 実施場所** : 湘南キャンパス19号館2階 オープンマルチアトリエ
- 宿泊場所** : 湘南キャンパスクラブハウス
- 参加者** : 学生40名(チャレンジプロジェクト(20)各2名)
- 講師** : 岡田工(チャレンジセンター長・現代教養センター主任・教授)
二ノ宮リムさち(現代教養センター・准教授)
田島祥(現代教養センター・講師)
池谷美衣子(現代教養センター・講師)

研修プログラム

DAY1 10:00～17:45	DAY2 9:00～17:30	DAY3 10:00～13:00
<p>【講師:田島(AM)・二ノ宮(PM)】</p> <p>▶10:00～10:15 【開会式】講師及び担当者紹介</p> <p>▶10:15～12:00 リーダーシップの理論に基づいてプロジェクトのあり方を考える(講義・GW)</p> <p>▶13:00～16:45 ファシリテーションを学びながらプロジェクトの「いまここ」と「ビジョン」を考える(講義・GW)</p> <p>▶17:00～17:45 チャレンジセンター1年の流れについて説明(説明担当:チャレンジセンター職員:村井健太郎)</p>	<p>【講師:岡田(AM)・田島(AM)・池谷(PM)】</p> <p>▶09:00～10:00 大学がチャレンジプロジェクトに期待すること(講義)</p> <p>▶10:15～12:00 プロジェクトを通じた様々な人との関わりについて考える(GW)</p> <p>▶13:30～14:40 コーディネーターと考える、プロジェクトの運営改善(講義)</p> <p>▶15:00～17:30 先輩リーダーに聞く!コーナー(ディスカッション)</p>	<p>【講師:二ノ宮】</p> <p>▶10:00～12:00 研修を振り返る(ワールドカフェ・発表)リーダーとしての目標を宣言する(ワーク・発表)</p> <p>▶12:00～13:00 修了式(修了証授与)・アンケート記入・記念写真撮影</p>

ものづくり館訪問一覧

7月20日 極東連邦大学の一行がチャレンジセンター・ものづくり館を視察

■湘南キャンパス

極東連邦大学と本学は今年4月にライフイノベーション分野での共同研究と人材育成に関する覚書を締結しており、「両大学による学術交流の方向性について具体的に話し合う」ことを目的に、ニキータ・アニシモフ臨時総長、ヴィクトリア・パノヴァ副総長(国際連携)、ウラジミール・クリロフ法学部長(本学名誉博士、元極東大副総長)らが来学。ライトパワープロジェクトが、これまでの活動や国際大会での成果、開発したマシンの特徴、環境問題に関する啓発活動の実績を説明しました。



ものづくり館訪問団体

4月12日	デンマーク御一行	13名	国際課
4月21日	タイ国工学部長協会	43名	国際課
4月25日	カザフスタン大学教員	2名	国際課
5月10日	ノースダコタ大学	2名	国際ネットワーク室
5月19日	東海大山形高校	6名、教員1名	一貫教育課
6月3日	付属菅生高校保護者	50名	一貫教育課
6月10日	付属浦安、望洋高校保護者	50名	一貫教育課
6月15日	駐日アルメニア大使	5名	国際ネットワーク室
6月21日	付属仰光中学校部学生	85名、引率7名	一貫教育課
6月22日	ハワイカボレイ高校	生徒3、引率1	国際ネットワーク室
7月1日	埼玉後援会(保護者会)	26名	校友会
7月20日	ロシア極東連邦大学	8名	国際ネットワーク室
7月25日	中国高校生(TokaiCoolJpn2017)	5名引率、通訳10名	国際教育センター
8月23日	インドネシア学生	台風のため中止	
10月23日	インドネシア学生(さくらサイエンスプラン)	10名	国際教育センター
11月9日	タイ、サイアム大学	博士課程13名、引率2名	国際課
11月17日	元デンマーク教育大臣、デンマーク工科大学長夫婦、他	7人	国際部門
11月20日	会計監査員	8名、引率2名	事務課
1月16日	さくらサイエンス、韓国高校生	20名、引率4名	国際教育センター
1月22日	キルギス国立総合大学、カザフスタン国立研究工業大	各12名(計24名)、引率1名	国際部門

10月21日 「2017年度チャレンジプロジェクト中間報告会」を開催

■湘南キャンパス2号館

今回は本キャンパスで同日開催した『TOKAIグローバルフェスタ2017』の一環として実施。全国のキャンパスで活動する21のチャレンジプロジェクトが成果を報告しました。プロジェクトに所属する学生たちは、それぞれのブースを訪れた地域住民や学生らに向けて活動の内容をはじめやりがいなどについて紹介したほか、普段会う機会のないキャンパスの学生同士で交流を深める様子も見られました。また、2号館前では、湘南キャンパスのライトパワープロジェクト・ソーラーカーチームと人力飛行機チームによる機体の展示や、サイエンスコミュニケーターによる実験ショー、熊本キャンパスで活動する先端技術コミュニティACOTによるVR体験・LEGOロボットの実演も実施。ソーラーカーと人力飛行機の機体は子どもたちが輪になって見学し、ソーラーカーの運転席に試乗しようとして列をつくっていました。また、実験ショーは長さの異なる金属パイプを地面に落下させて音楽を奏でる『バンジーチャイム』で「星に願いを」を演奏。VR体験ではACOTが作成した迷路ゲームを参加者が体験しました。



12月15日 「第18回チャレンジセンターセミナー」を開催

■湘南キャンパス8号館

「海外で活躍する大学OBが語る『世界で戦うための三つのマインド』」と題し、教養学部卒業生で森永製菓株式会社取締役上席執行役員海外事業本部長の山下充洋氏が講演。代々木・高輪・清水・伊勢原・熊本・札幌の各キャンパスをテレビ会議システムでつなぎ、学生や教職員ら315名が聴講しました。山下氏は株式会社マダムに就職後、2年目にシンガポール、4年目にはマレーシアに責任者として赴任し、現地会社の設立に奔走した日々を紹介。「言葉も文化も異なる外国人の自分を信じてくれた従業員に報いたいという気持ちが、経営のプロフェッショナルを目指す原動力になりました」と語りました。さらに、海外で仕事をやる際に必要なマインドとして、「メンタルタフネス」「自分の前後の領域にまであえて踏み込む責任感」「物事の本質を考え理解する力」の3つを提示。終了後には会場から多くの質問が寄せられました。



2018年 2月5日 「2017年度チャレンジプロジェクト最終報告会」を開催

■湘南キャンパス8号館

湘南、代々木、高輪、清水、熊本、札幌の6キャンパスをTV会議システムでつなぎ、全体で約650名が参加しました。山田清志学長のあいさつ後、各プロジェクト代表のプレゼンターがそれぞれの活動について、スクリーンに写真やテキスト、図表を映しながら発表。プレゼンテーション終了後、審査員を務めた本学連合後援会の二重作昌明会長、本学同窓会東京ブロックの宮原孝夫会長、株式会社マイスターエンジニアリングの長安元和氏、株式会社高見沢サイバネティックスの四方昭雄氏、株式会社アビストの柳澤宏美氏、本センターの岡田工センター長(現代教養センター教授)がメンバーの発表や活動内容を審査。特に高い評価を得たプロジェクトに贈られる「グッドプレゼンテーション賞」には、Takanawa共育プロジェクト、Tokai Formula Club、東海大学学生ロケットプロジェクトが選ばれ、岡田センター長が代表者に賞状を授与しました。



2018年 2月24日 「電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会」を開催

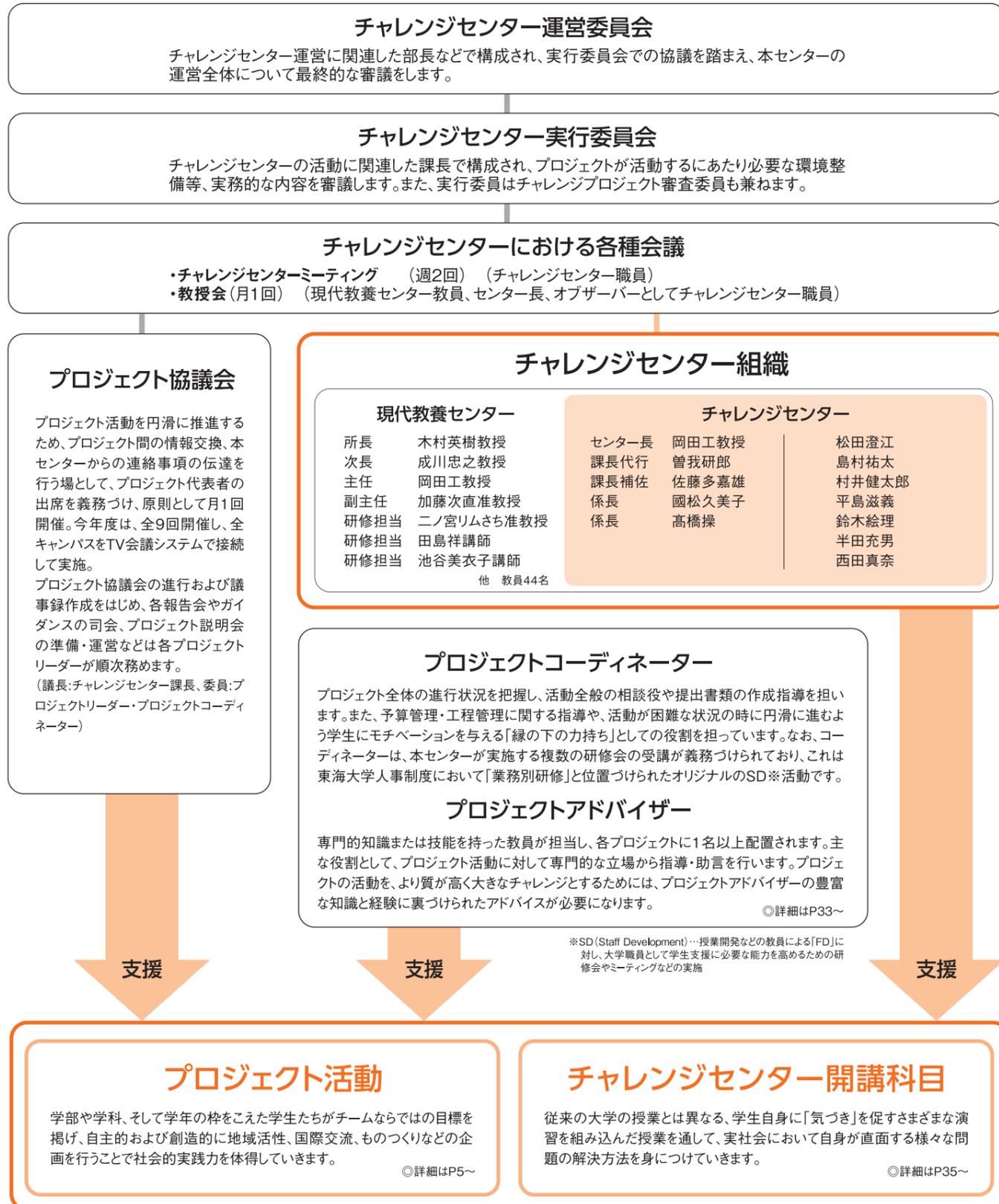
■代々木キャンパス

多様なエネルギーについての最新の研究成果を共有するとともに、研究者や技術者の交流の場を提供することを目的に行われているもので、会場には他大学の学生や教員、高校生、企業関係者など約250名が集まりました。はじめに、川越繁一氏(日本太陽エネルギー学会理事兼事務局長)と岡田工チャレンジセンター長(現代教養センター教授)が開会のあいさつ。続いて、ソーラーカーチームの総監督で日本太陽エネルギー学会の理事を務める現代教養センターの木村英樹所長(工学部教授)が登場しました。講習会では、電気自動車・燃料電池車・ソーラーカーの設計や走行に携わる企業関係者などが最先端の技術革新や普段の活動内容を紹介。本学からは、工学部の福田紘大准教授・佐川耕平助教(ソーラーカーチームアドバイザー)が講演しました。会場の外ではソーラーカーチームの学生や関係企業がブースを出展し、活動内容や新製品について紹介しました。



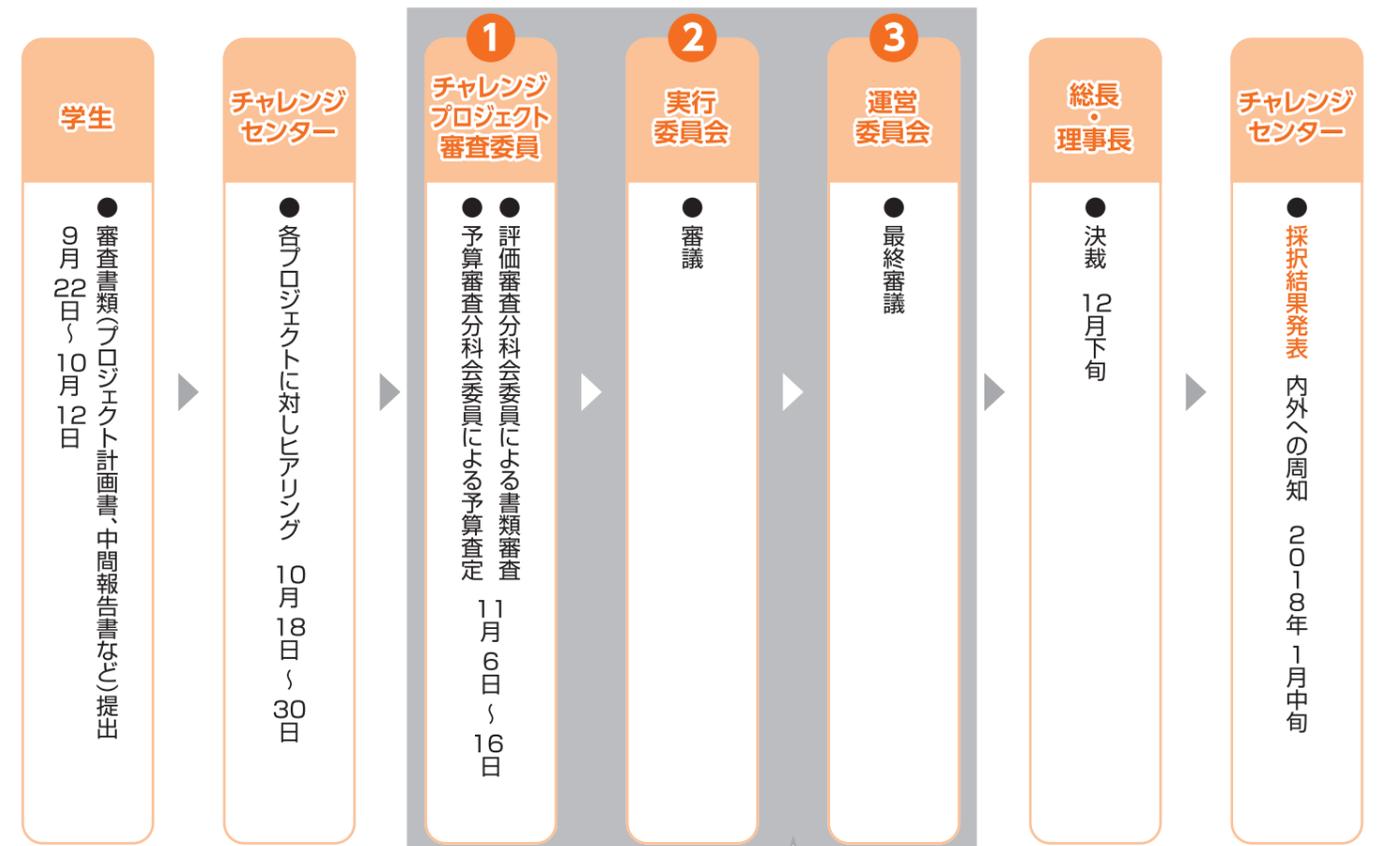
チャレンジセンターの支援体制・運営体制

本センターでは、学生たちがより大きな目標を成し遂げられるように、様々な面できめ細かくバックアップ。チャレンジセンターミーティングや教授会、プロジェクト協議会を通じて、組織内での情報交換や連携を図るとともに、プロジェクト活動の質を高めるための人的な支援として、各プロジェクトにコーディネーターとアドバイザーを配置しています。原則として、コーディネーターおよびアドバイザーは本学の教職員から選抜。安心して活動に取り組むことができるサポート体制が整っています。



本学では、チャレンジプロジェクト採択をはじめとする本センターの事業計画や修了認定、チャレンジセンター科目に関することなどについて審議・決定を行う、チャレンジセンター運営委員会および実行委員会を設置しています。本センターの取り組みは、これら委員会の承認を得て実施されました。

◆チャレンジプロジェクト採択までの流れ



2017年度の会議開催と審議事項

	実行委員会	運営委員会	審議事項
第1回	5月11日(木)	5月15日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ● 2017年度チャレンジプロジェクト支援金審査について ● 松前重義記念基金「2017年度ユニークプロジェクト」選考について
第2回	7月27日(木)	8月4日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ● 2018年度チャレンジプロジェクト募集要項について ● 松前重義記念基金「2018年度ユニークプロジェクト」募集要項について ● 2018年度チャレンジプロジェクト審査方法について
第3回	12月4日(月)	12月11日(月)	● 2018年度チャレンジプロジェクト審査について
第4回	3月1日(木)	3月7日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ● 2017年度チャレンジプロジェクト修了認定について ● 2018年度チャレンジセンター学年暦について

- 1 チャレンジプロジェクト審査委員**

〈評価審査分科会委員〉
実行委員、付教員、学園校友課長、現代教養センター教員、チャレンジセンター職員による書類審査(7キャンパス25名、うち教員9名、職員16名による)

〈予算審査分科会委員〉
事務課長、事務課(会計担当課長補佐)、チャレンジセンター長、チャレンジセンター課長
- 2 実行委員会**

委員長 : 岡田工チャレンジセンター長
委員 : 高等教育室長、入試広報課長、事務課長、施設管理課長、教務課長、学生課長、キャリア就職課長、代々木教学課長、高輪教学課長、清水教学課長、伊勢原教学課長、熊本教学課長、阿蘇教学課長、札幌教学課長、チャレンジセンター課長
- 3 運営委員会**

委員長 : 梶井龍太郎副学長
副委員長 : 岡田工チャレンジセンター長
委員 : 大学運営本部長、大学広報部長、地域連携センター所長、研究推進部長、事務部長、入学センター所長、教学部長、教育支援センター所長、キャリア就職センター所長、国際教育センター所長、現代教養センター所長、学部事務室長

プロジェクトコーディネーター・アドバイザー

本学は教員と職員による協働体制で教育支援を推進しています。その一環として、本センターでは、プロジェクト活動の質を高め、より高度な目標を成し遂げられるよう各プロジェクトには本学教職員から選抜されたコーディネーターとアドバイザーを配置しています。チャレンジプロジェクトにおいては、コーディネーターとアドバイザーが必ず配置されますが、ユニークプロジェクトでは学生からの支援要請に基づき本センターで審議の上、配置を決定します。

【2017年度 プロジェクトコーディネーター 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属	担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト			ユニークプロジェクト		
病院ボランティアプロジェクト	平島滋義	チャレンジセンター	熊本地域プロデュースプロジェクト	高倉智之	熊本事務課
スポーツ社会貢献プロジェクト	矢後慶子	キャリア就職課	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	石原弘慎	熊本事務課
サイエンスコミュニケーター	森川真希	技術共同管理室	阿蘇は箱舟プロジェクト	高橋誠二	阿蘇教学課
キャンパスストリートプロジェクト	村井健太郎	チャレンジセンター	あにまるれすきゅープロジェクト	金子博	農学教育実習センター
Tokai Formula Club	関根啓由※	技術支援課	札幌ボランティアプロジェクト	神鷹孝至	農学教育実習センター
ライトパワープロジェクト	佐藤多嘉雄	チャレンジセンター		伊藤真人	九州キャンパス復興課
東海大学学生ロケットプロジェクト	奥山三喜	事務課		番場浩	札幌教学課
Tokai International Communication Club	雨木秀文	入試広報課		松島佑介	札幌教学課
3.11生活復興支援プロジェクト	島村祐太	チャレンジセンター			
DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト	三橋雅之	図書課			
熊本復興支援プロジェクト★	高橋操	チャレンジセンター			
Beijo Me Liga★	松本理奈※	情報システム課			
Challenge for the Borderless World★	大岡新平※	伊勢原教学課			
Takanawa共育プロジェクト	河村裕文	高輪事務課			
	渡部真紀	高輪教学課			
	福岡恵	熊本教学課			
	佐藤祥行	熊本事務課			
	中野宏美	熊本教学課			
	六嘉孝裕	熊本教学課			
	高橋大優	熊本教学課			
	石川真之	熊本事務課			

★…新規および改名 ※…新任

【2017年度 プロジェクトアドバイザー 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属	担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト			ユニークプロジェクト		
病院ボランティアプロジェクト	児玉千代子	健康科学部看護学科	熊本地域プロデュースプロジェクト	高野誠二	経営学部観光ビジネス学科
スポーツ社会貢献プロジェクト	池村明生	教養学部芸術学科		鈴木康夫	経営学部観光ビジネス学科
サイエンスコミュニケーター	萩裕美子	体育学部スポーツレジャーマネジメント学科		李昭知※	経営学部観光ビジネス学科
キャンパスストリートプロジェクト	岡田工	現代教養センター		小林寛子	経営学部観光ビジネス学科
	成川忠之	現代教養センター		田中孝幸	農学部応用植物科学科
	吉永昌史	工学部動力機械工学科		村田浩平	農学部応用植物科学科
	森下達哉	工学部動力機械工学科		岡田工	現代教養センター
	加藤英晃	工学部動力機械工学科		森友靖生	農学部応用動物科学科
	成田正敬	工学部動力機械工学科		大形利之	国際文化学部国際コミュニケーション学科
	高橋俊	工学部動力機械工学科		植田俊	国際文化学部地域創造学科
	山本建	工学部動力機械工学科			
	木村英樹	工学部電気電子工学科			
	福田純大	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻			
	池田知行	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻			
	佐川耕平※	工学部電気電子工学科			
	那賀川一郎	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻			
	森田貴和	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻			
	中藤恭一	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻			
	田口香奈恵	国際教育センター			
	森山美紀子※	国際教育センター			
	杉本洋文	工学部建築学科			
	堀本麻由子	現代教養センター			
	中村なおみ	体育学部体育学科			
	田巻以津香	体育学部生涯スポーツ学科			
	二ノ宮リムさち※	現代教養センター			
	小貫大輔	教養学部国際学科			
	崔一煥	高輪教養教育センター			
	佐藤弘幸	情報通信学部通信ネットワーク工学科			
	田畑智章	情報通信学部経営システム工学科			
	岡晃※	総合医学研究所			
	中嶋卓雄	情報教育センター			
	松本欣也	基盤工学部電気電子情報工学科			
	村上祐治	基盤工学部電気電子情報工学科			
	阿久津雅子	基盤工学部電気電子情報工学科			
	清田英夫	基盤工学部電気電子情報工学科			
	高橋将徳	基盤工学部電気電子情報工学科			
	佐松崇史	基盤工学部電気電子情報工学科			

★…新規および改名 ※…新任

教職員のプロジェクト支援のスキルアップ

チャレンジプロジェクトのコーディネーターおよびアドバイザーを対象にプロジェクト支援に活用できるスキル向上を目的とした研修や意見交換会をTV会議システムを活用し実施しています。特に、プロジェクトコーディネーターに対する研修は、多様な学生の成長に応じられるよう、職員が「教育の担い手」である認識を深める本センター独自のSDとなっております。

開催	研修名	テーマ・内容	担当	人数
4月11日	コーディネーター事務研修	センター長、職員によるチャレンジセンター教育プログラム及びコーディネーター業務に関する説明 ●プロジェクトコーディネーターの役割について ●予算執行の電事項について ●チャレンジセンター業務について ●勤務管理について	岡田工(チャレンジセンター長) 曾我研郎(チャレンジセンター課長代行) 高橋操・島村祐太(チャレンジセンター)	27名
5月19-20日	コーディネーター能力研修	テーマ:経験から集めるプロジェクトコーディネーターのコツポイント ●Tipsとは? ●コーディネーターの仕事場面を整理する。その他 テーマ:社会的実践を育むコーディネーターの役割と行動 ●社会的実践力とは?~チャレンジャーブリックを通じて~ ●社会的実践力を育む視点から「コーディネーター宣言」を見直す	池谷美衣子(現代教養センター) 二ノ宮リムさち(現代教養センター) 田島祥(現代教養センター)	17名
6月26日	アドバイザーミーティング	●チャレンジセンターの教育プログラムとは ●コーディネーター能力研修の報告 ●アドバイザーとしての支援と課題 ~コーディネーターとの協働を考える~	岡田工(チャレンジセンター長) 池谷美衣子(現代教養センター) 二ノ宮リムさち(現代教養センター)	18名
10月18日	コーディネーター中間研修	テーマ:事務職員キャリアにおけるプロジェクトコーディネーター経験の意義 ●コーディネーターを経験して	二ノ宮リムさち(現代教養センター) 原田千穂(湘南校舎教養学部教務課)	28名
2018年2月23日	コーディネーター・アドバイザー意見交換会	テーマ:プロジェクト学生へのアドバイスと教職員としての関わり方 ●「大船渡及び石巻の東日本大震災被災地の復興支援」での事例発表	二ノ宮リムさち(現代教養センター) 堀本麻由子(現代教養センター) 島村祐太(チャレンジセンター)	30名

※湘南、高輪、熊本・阿蘇、札幌の4キャンパスをTV会議システムにて接続



ライトパワープロジェクト
人力飛行機テストフライト



サイエンスコミュニケーター
和歌山県那智勝浦市立勝浦小学校訪問



3.11生活復興支援プロジェクト
学生サポートセンター「学生ボランティア団体」採択



Tokai International Communication Club
Challenge! 国際交流 in 伊勢原 東海大学訪問



スポーツ社会貢献プロジェクト
秦野こどもまつり



Beijo Me Liga
マルチカルチャーキャンパス

チャレンジセンター開講科目

2016年4月に総合教育センターとチャレンジセンターが統合し、新組織である現代教養センターが発足しました。2017年度は、チャレンジセンター科目として、「社会的実践力科目」と「ジャーナリズム実践教育科目」の2つの科目群が開講されています。

【社会的実践力科目】

目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶための科目群（「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」「プロジェクト入門」「プロジェクト実践」など）を「社会的実践力副専攻」として開講。目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶことによって、社会に出てから通用する実践力を身につけます。

挑み力(演習A)

担当：池谷美衣子(現代教養センター 講師)

この授業では、「労働事例から考える「がんばること」の功罪」をテーマに、授業名でもある(挑み力)そのものについて思考を深めることを目的としています。本学では、社会が求める4つの力の一つである(挑み力)について、「困難かつ大きな課題に勇気をもって挑戦する力」と説明されています。それは、とにかく頑張れという精神論でもなく、困難に負けない強い個人であり続けよ、という自己責任の強調でもありません。そもそも、その「困難かつ大きな課題」は「挑戦」するだけの価値があるのか、「挑戦」するための「勇気」は自分一人の覚悟に基づくものなのか、そして、「挑戦」に必要なのは「勇気」だけなのか、少し考えるだけでも(挑み力)をめぐってたくさん疑問が湧いてきます。しかし、大学がどう定義するか以上に重要なことは、本学の学生一人ひとりがこの言葉をどう解釈するか、であると考えます。

わかるようでわからない(挑み力)を「がんばること」と一般化し、それが求められやすい労働の場を切り口にして、本授業は展開しました。まず、アイスブレイクとして、履修者が自分のがんばった経験・がんばれなかった経験を振り返って共有し、「がんばるために必要な条件」をランキング形式にして皆で考えました。その上で、前半は、戦後日本の経済史と照らし合わせながら、実在の企業やその労働者が集団で困難な課題に立ち向かい、成果を上げていった実際のストーリーを学びました。NHKドキュメンタリー「プロジェクトX」を教材に、番組視聴とグループ・ディスカッションを重ねました。知られざる苦勞に対する感動、仲間的重要性、当時と現在では職場の人間関係が違うのではという発見、各時代の経済状況と一人一人が「がんばること」との関係、それを見守っていた家族の心情の想像、職場に男性しか出てこないことへの違和感…ディスカッションの内容はグループごとに、かつ、回を重ねるごとに広がっていき、出された論点は多岐にわたりました。

後半は、一転して、過度の「がんばること」の帰結として、日本で社会問題になっている過労死・過労自殺について取り上げました。自分たちは何のために働くのか、過労死・過労自殺はなぜ起きるのか、どんな人がどのような過程で追い込まれていったのか、どうすれば防ぐことができるのか。過労死事件の報道記事や遺族の手記を読みながらイメージを膨らませ、重い問いに言葉をひねり出しながら、ディスカッションを重ねました。最後には、実際に神奈川県内で過労死事件を担当されている弁論士や、夫や息子を過労死で亡くしたご遺族に来ていただき、直接お話を伺い、グループワークや質疑応答に取り組みました(神奈川県新聞2017.7.14,厚生労働省「過労死等防止対策等労働条件に関する啓発事業」2017年度実施事例(https://v3.apollon.nta.co.jp/keihatsu-mhlw/,2018.2.12取得))。

「がんばること」や「困難かつ大きな課題に勇気をもって挑戦する力」に関わって、本授業を通じて受講生が感じたことは様々です。「ご遺族の話の中で、日本にある「休みづらさ」が過労死に大きく影響しているというのは、とても共感できた。アルバイトでも「休みづらさ」はあるので、社会人にはさらに「休みづらさ」があるのだと思う。このような社会に根付いた文化から変えるべきところがあるのではないかと(4年)」、「好きな仕事を命を落としたこと、どれだけ辛くて悔しかったかと思う、遣された家族としても大変な道りだったんだろうなと思った。(中略)大切な人を亡くされて自分自身も辛い中であけてくれた声で、社会が変わろうとしていくことはすごいことだし、そのなかでこれから仕事をしたい私たちは、もっと自分を大切にできる仕事のしかたを見つけて実践していく必要がある。(1年)」「精神論や自己責任論に絡め取られない(挑み力)のありようが、「文化」「社会」「共有」「継承」「変化」など、それぞれの受講生がつかんだキーワードで深められていきました。

本授業はグループワークを核に進むため、受講生はグループ内での関係構築や話し合いの技法なども習得します。しかし、社会的実践力とは、そのような技法としてのハウツーに集約されるものではありません。大人にも解決策が見出せていない現実の「困難かつ大きな課題」に、聴せず向き合うこと、一つの言葉がもつ意味にこだわって、とことん考え抜くこと。そして、現実の課題に対する自分の考えを、自覚的に選んだ言葉で表明すること。

課題についてとことん考えた受講生たちは、同時に、大学や社会、大人に対して批判的なまなざしを向けてきます。「働かずに苦しみながらも働き続けるということは、見えない怪物と闘い続けることなのかもしれない。学校では、働くことや就職、将来についてたくさん情報を与え、就職への焦りを煽るけれど、こういった就職後に起こりうる危険性についてはなかなか教えてくれない。ブラック企業や過労死が問題視される中、それではあまりに無責任ではないかと思う(1年)」「この授業をどっている人たちだけであだけの意見(解決策)が出たのに、日本の大人たちがこの問題を解決できないのは、大きな間があるのではないかと。今の状況で考えられていることが、当事者になったら考えられなくなってしまうのだと思う(3年)」。

このような学生からの意見表明も、教員である私自身が、さらには、大学や社会がどのように受け止め、引き取っていくのか。教室と社会をつないで展開される授業に課された、大きな課題であると思います。



プロジェクト入門

担当：二ノ宮リムさち(現代教養センター 准教授)

本科目は、平塚市宮松町をフィールドに、実際の地域で起きている課題や取り組みについて関係者から学びながら、学生の視点で「持続可能な地域づくり」を考え、地域づくりの過程に参画していくものです。学習の到達目標として、1)「持続可能な地域づくり」について自分なりの考えを持つことができる、2)自分の意見を表現し、相手の意見に耳を傾け、対話することができる、3)地域の課題を見出し、その解決について考えることができる、4)課題に対し、計画を立て、実行し、反省し、次につなげられる、5)さまざまな人と協力し、チームで課題に取り組むことができる、を設定しています。2017年度前期以降、継続的に開講し、希望する学生は複数学期にわたって履修できるよう設計していますが、地域と協働するため、受講生には相応の責任感と柔軟性を求め、各学期20名程度に限定しています。学生が地域の課題を掘り起こし、関係者と協働して解決を目指すなかで、実社会を創造する市民力を育む、パブリックアチーブメント(PA)型教育の実践として位置付けています。

宮松町は、2016年に開業した「ららぽーと湘南平塚」に隣接し、就労人口や買い物客の急増や、一帯の大規模住宅開発に伴う新住民の流入など、大きな変化の只中にあります。かつてはメインストリートとして賑わったという宮松町商店街は、衰退の時代を経て、近年、新世代のパン屋やカフェ、フルーツスタンドなどが並び始め、今また平塚駅とららぽーとを結ぶ道として活用されつつあります。こうしたなか、新住民と旧住民、商店街と新たな商業施設、そこへ集まる就労者や買い物客等、さまざまな主体が豊かに交流、共存できる持続可能なまちづくりを実現する、それが学生に課されたテーマです。学生たちは、自分たちができることを考え、現場の実感を通じて社会を創る力を育てていきます。

2017年度前期は、「地域とは何か」を考える講義やワーク、宮松町自治会会長の石田文男氏や、コミュニティ形成プロデューサーとして当該地域に関わる吉澤卓氏による現場の状況に関する講義等に続き、フィールドワークを行い、ららぽーとによる地域への影響と、今後の地域の方向性について考えました。その結果、新旧住民の交流を促すことが重要であり、そのために宮松町商店街を中心とした地元の店や企業について新住民へ向け情報を発信したいと考えた学生たちは、店・企業でのインタビューと、それにもとづくマップ制作に取り組みました。7月に実施したマップのお披露目会では、自治会長より「大学が自治会と連携して何かに取り組むのは、これまではなかなかなかったことだと思いますが、これからは私たちも一緒に勉強しながらまちづくりを考えていく必要があります。」とお話いただき、自治会役員の皆さんからは「もっとたくさんのお店を紹介してほしい。」「新しく住み始めた人がほいほい情報として、薬局や歯医者、習い事ができるお店など、商店街を歩いただけではわからないことを盛り込んでみては?」といったご意見をいただきました。

さらに後期は、約半数が前期からの継続、残りの半数が新規という履修学生が、当該地域に関する講義やフィールドワークの後、チームに分かれ、町内にある5つの公園を紹介するマップの作成や、それらの公園を活用した地域づくりの提案構築に取り組みました。地域の新旧コミュニティにおけるリーダーの立場にある方々や、市の職員をお招きした発表会では、まず「公園マップ」について、「今後引越してきた人がこのマップを見ることで各公園のよさを知る機会となり、実際に訪れてもらいたい」との発表がありました。続いて、宮松町の公園活用について「自然に触れ合え!ネームプレート&自然アート制作編」「ゆるスポーツを体験しよう!」「公園から始まる商店街の活性化・交流・防災」「大学と宮松町が「食でコラボ!」公園を活用した商店街活性化イベント」と、4つの提案がなされました。参加者からは、「ぜひ実現してほしい!」「イベント情報などを共有する方法を現在模索中だが、対策を一緒に考えてもらいたい」と、進展への期待が示されました。

1年間を通じた学生たちの反応から、「地域が学生を育てる力」を実感しています。地域づくりはじっくりゆっくり、地域の関係者と相談し協力しながら進めていく必要があります。本科目を継続開講しつつ、今後も自治会のほか、企業や行政の皆さんともタッグを組み、実践を展開しつつ、よりよい地域づくりへ向けた取組と教育の連携を地道に進めていきたいと考えています。



【ジャーナリズム副専攻】

2017年度のジャーナリズム副専攻科目は、カリキュラム改訂を控えて引き続き変則的な開講となりました。科目数は前年度と同様の18科目(36単位)、うち2科目は、春、秋 semesterごとそれぞれ読売新聞東京本社と業務委託契約を交わして同社編集局の部長、デスク、編集委員などのベテラン記者を派遣してもらい開講しました。

春学期は、「政治ジャーナリズム」の科目名で硬派部門を中心に政治、経済、医療・福祉、科学、秋学期は「文化ジャーナリズム」の中で、文化(映画)、スポーツ、デジタル、写真の各分野をオムニバス授業としてそれぞれ専門記者に講義してもらいました。

これらの読売講師クラスは、以前から履修希望者が多い人気科目でしたが、春、秋ともに300人以上の履修希望者があり、履修制限を実施せざるを得ない状況となりました。

2016年度まで「特定プログラム」として教務課分室での窓口登録を義務付けていた科目の中には、周知不足から履修登録者が極端に少ない科目がありましたが、WEB登録となったため各科目とも適正規模のクラスになりました。

ジャーナリズム副専攻は、2018年度から新設の文化社会学部広報メディア学科の副専攻科目として再スタート、カリキュラム改訂により新たな科目群となる予定です。

ジャーナリズム・ゼミナールA/B

実践的な報道取材のゼミナールを目指し、春、秋ともに水曜日午後の3,4限を使って2コマ連続で開講しました。このクラスでは、研究室での様々な社会問題の討論とは別に、現場取材演習として学外授業を実施していますが、今年度は、春には横浜地方裁判所の刑事裁判傍聴や東京の靖国神社、千鳥ヶ淵戦没者墓苑、築地市場などに足を運び、それぞれの課題を考えました。人の多い靖国神社とすぐ近くにありながらひっそりと静まり返る千鳥ヶ淵戦没者墓苑では、両施設の雰囲気の違いに驚きその背景を考えるなど、ニュースに登場する現場を通して社会問題を見る目を養いました。

法学部に所属していても裁判を傍聴したことがない学生がほとんどで、目の前の法廷で展開される犯罪の実態に、「世の中にはこういう人たちがいたのか」と、少なからずショックを受けた学生もいたようです。

一方、秋学期は、横浜地裁に行くとともに、北朝鮮の核開発やミサイル発射で緊張する横須賀港を見学しました。日本海から帰港したばかりの米国の航空母艦やイージス艦などは、テレビのニュースなどではよく目かける艦船ですが、実際に現地で見るとその巨大さと威圧感に国際関係の緊張ぶりを肌で感じたようでした。

学外授業では、帰ってすぐに現場で見たり聞いたりを原稿化、最近の学生に不足している自分で見て考えて書くことのトレーニングを繰り返し実施しました。



秋のジャーナリズム・ゼミナールでは、横須賀港米軍艦船を見学に行きました

読売講師派遣科目

春学期の「政治ジャーナリズム」では、トランプ政権と日米関係や憲法施行から70年といった政治・外交をめぐる問題や岐路に立つEU、グローバル化と格差などの経済問題、そして社会保障と年金の仕組みという身近なテーマまでをそれぞれの分野の専門記者が講義しました。

また、秋学期では、箱根駅伝が日本長距離界に果たした役割やサッカー・ワールドカップ予選での歴史的敗戦「ドーハの悲劇」の名付け親の記者も登場、関心の高いスポーツ取材の興味ある舞台裏の話や苦勞話も聞けたようです。

この他、メディアビジネスの新たな展開、SNS時代の写真報道、それに映画担当記者を長く務めている福永聖二・調査研究本部主任研究員の映画の見方講義では、小津安二郎監督の「東京物語」に込められた小津監督のこだわりやヒッチコック監督の「サイコ」の生まれた背景などについてプロの見方を学びました。



読売新聞で映画評論を長く続けてきた福永聖二・調査研究本部主任研究員の映画の深読み講座では、学生たちは映画の細部を見逃すまいとスクリーンを見つめていました

ルーブリックによる参加学生の評価

ルーブリックを活用した活動の振り返り

チャレンジセンターでは、プロジェクト活動を通じた学生の成長を振り返る手段の一つとしてルーブリックを活用している。学生自身が4つの力に沿った12の観点について9段階で自己評価を行うものであり、年度内に3回実施している(具体的な項目の内容は2015年度活動報告書を参照のこと)。7月に4～6月の活動を、10月に7～9月の活動を、1月に10～12月の活動を振り返り(順に、初期・中期・終期)、どのような行動や経験をしてきたかを記録すると共に自己評価を行う。今年度は、病院ボランティアプロジェクト、キャンパスストリートプロジェクト、ライトパワープロジェクトの学生が参加した。

本稿では、2016年度活動報告書に引き続き、継続的な学生の変化について全体の傾向をとらえていく。対象とする学生は、2016年度に3回、2017年度に2回(初期・中期)の計5回ルーブリックを記入した48名(2017年度2年生34名、3年生14名)である。図1、2には2017年度の学年を示しており、例えば図1では、2016年度に1年生だった学生(2017年度の2年生)の5回分の結果の平均値が図示されている。

図1、2より、いずれの学年においても、2016年度初期に比べて2017年度中期は評価が高まっていることが読み取れる。この傾向は2年生で顕著であり、「自ら考える力」「挑み力」「成し遂げ力」の項目を中心に2段階ほど評価が高まっていた。1年生の初期はプロジェクトに加入したばかりの段階であり、「自ら考える力」やプロジェクト内での自分の役割や貢献の仕方を見出していく「アイデンティティ獲得」等に対する評価は高くない。しかし、1年半の活動を経て様々な経験をすることにより、評価が高まっていくのだと考えられる。また、3年生では、2016年度初期の評価がすでに中程度以上であることから、2年生に比べると伸び幅は大きくないが、プロジェクトの中心として活動していく中で様々な項目で評価が高まっていくのだと考えられる。

これらの結果は、学年ごとの平均を示しているが、プロジェクトや個人によって活動のスタイルは異なることから、より個人内での変化に着目していくことが重要である。また、ルーブリックは学生個人の振り返りのツールとして使用されるだけでなく、プロジェクトのアドバイザーが学生に指導する際に活用するツールにもなり得る。そこで最後に、ライトパワープロジェクトでのルーブリックの活用について事例を報告する。

本プロジェクトは、世界大会優勝を目指してソーラーカーの製作と走行を行うチームと、自ら人力飛行機を製作し、琵琶湖大会での優勝を目指すチームから構成され、1年生から大学院生まで150名を超える。このような状況下では、コーディネーターが学生一人ひとりを深く理解することは非常に困難である。そこで、初期のルーブリックが提出された8～9月にかけて、ルーブリックを介したグループ面接を行っている。その目的は、

- ①ルーブリックの意図に沿って間違いなく自己評価がなされているかを確認すること。
- ②メンバーの顔と名前、所属学科を覚え、個々の欲求を理解すること。また、今後の活動に向けた意識付けを行うこと。
- ③チームや各係の目標を、メンバー及びコーディネーターが共有すること。等々である。

特に①では、過大評価・過小評価しているケースはないか、具体的な活動実績と合わせて再検討させることで、正しく自己評価できるように促している。

この面接によって、学生からコーディネーターに声をかけやすくなったという感想もたれている。また、コーディネーターとしても、テスト走行やフライト等の活動やその引率が円滑に回るようになったと感じている。

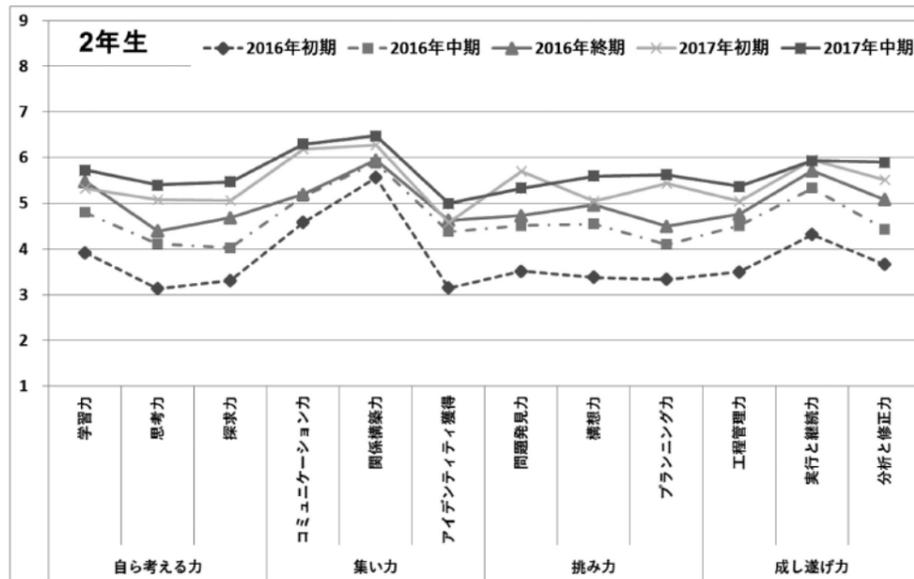


図1. 2年生の結果 (平均)

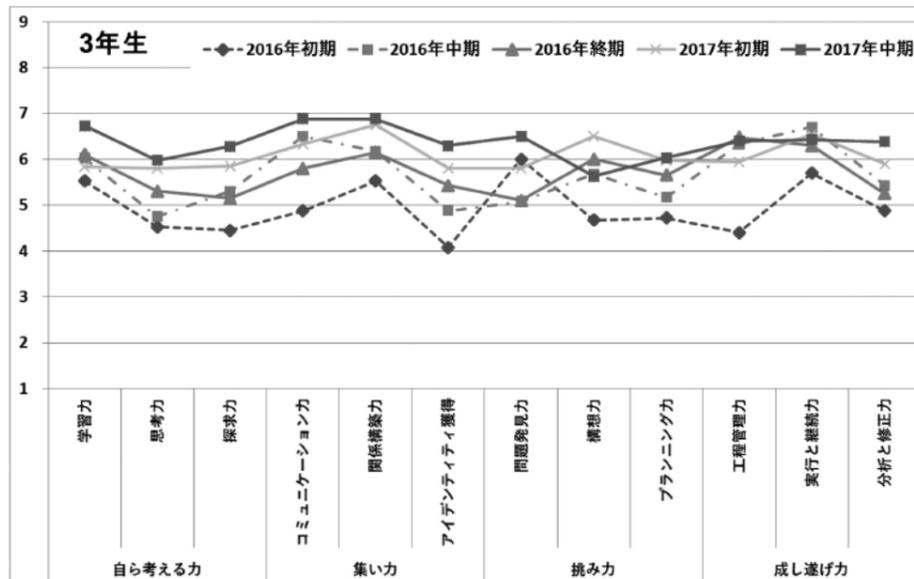


図2. 3年生の結果 (平均)

To-Collaboプログラムの取り組み

エコ・コンシャス計画 エネルギー・ハーベスト事業

福田 紘大(工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻 准教授)、木村 英樹(現代教養センター 所長・工学部電気電子工学科 教授)、田中 博通(海洋学部環境社会学科 教授)、清田 英夫(基盤工学部電気電子情報工学科 教授)、富田 恒之(理学部化学科 准教授)、長谷川 真也(工学部動力機械工学科 准教授)、高橋 俊(工学部動力機械工学科 准教授)

地域の子どもたちや住民を対象とした環境・エネルギー啓発教室および研究会を開催することで、本学で研究・開発を行っている最先端のエネルギー技術を紹介し、また、地域の方々と一緒にエネルギーについて考え、議論する機会を作り、将来自分たちが暮らす地域のエネルギー供給についても考えます。以上の目標を達成するために、東海大学熊本キャンパスにて、シンポジウム「創エネ・省エネ技術の最先端～考えよう私たちのエネルギー～」を開催しました。地域で環境・エネルギー問題に取り組むNPO法人「九州バイオマスフォーラム」の中坊真事務局長による基調講演や、環境技術や再生可能エネルギーが専門で本事業に関わる福田 紘大准教授、木村英樹教授、田中博通教授による3件の講演、熊本市環境局環境推進部環境政策課温暖化対策室長の坂本康祐氏を交えたパネルディスカッションを行いました。



ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業

池村 明生(教養学部芸術学科 教授)、岡田 工(現代教養センター 教授)、福田 紘大(工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻 准教授)、崔 一英(高輪教養教育センター 教授)、福崎 稔(熊本教養教育センター 教授)、遠藤 晃弘(観光学部観光学科 講師)、村上 祐治(基盤工学部電気電子情報工学科 教授)、村田 浩平(農学部応用植物科学科 教授)他24名

本プロジェクトでは、湘南校舎は「グローバルフェスタ2017の開催」、札幌校舎は「南沢ランデブー祭の開催」、高輪校舎は「子ども教育支援事業」、代々木校舎は「地域連携イベントの開催」、清水校舎は「洋上セミナーの開催」、九州キャンパスは「世界一歩行きたい科学広場 in 熊本」を開催しました。

湘南キャンパスで10月21日に、「TOKAIグローバルフェスタ2017」を開催しました。昨年に続いて2回目の開催となる今回は、11のプログラムで多彩な企画を用意。当日はあいにくの雨にもかかわらず、1000名以上の来場者を迎えました。

10号館と13号館では、教養学部芸術学科が「おひろめ芸術祭」を開き、音楽学課程、美術学課程、デザイン学課程の特徴を生かした来場者参加型のプログラムで好評を博しました。10号館の入り口では、教養学部人間環境学科自然環境課程が「学び楽しむ環境教室in湘南」を初開催。校舎の近くを流れる金目川の生物を紹介するミニ水族館や、木や竹を使った遊び体験と工作教室は多くの来場者でにぎわいました。11回目を迎える「国際フェア」(国際教育センター主催)も8号館で開催

し、留学生と日本人学生が協力して国や地域に分けた20ブースを出展。さまざまな形で各国の文化を紹介しました。2号館では、本学チャレンジセンターの各プロジェクトが活動成果をポスターセッション形式で発表する「チャレンジプロジェクト報告会」を「チャレンジフェア」の中で実施。科学実験の実演やソーラーカーの展示も盛り上がりを見せました。地域の方が講師となった「ボールウォーキング体験会」も初めて開催。新しいウォーキングのスタイルを参加者が体験しました。



安全安心プロジェクト

梶田 佳孝(工学部土木工学科 教授)、田島 祥(現代教養センター 講師)、内田 理(情報理工学部情報科学科 教授)、杉山 太宏(工学部土木工学科 教授)、山本 吉道(工学部土木工学科 教授)、山本 義郎(理学部数学科 教授)、成川 忠之(現代教養センター 教授)、富田 誠(教養学部芸術学科・デザイン学課程 講師)、木村 英樹(工学部電気電子工学科 教授)、長尾 年恭(海洋研究所 教授)、村上 祐治(基盤工学部電気電子情報工学科 教授)、福崎 稔(熊本教養教育センター 教授)、崔 一英(高輪教養教育センター 教授)、宇津 圭祐(情報通信学部通信ネットワーク工学科 講師)、籠谷 恵(健康科学部看護学科 講師)

本取り組みは、自治体や地域住民と連携して多様な災害への対応を確認することを目的としています。2017年度に実施した様々な活動のうち、本稿では、SNSを活用した災害情報共有システムの実証実験と、熊本地震に関する公開シンポジウムについて報告します。

7月13日に、神奈川県立秦野高等学校と共同で「SNSを活用した災害情報共有システムの実証実験」を行いました。このシステムは、情報理工学部の内田理教授が中心となって開発を進めており、Twitterの投稿に位置情報や救助要請を伝えるハッシュタグが自動で付記されるDITS(Disaster Information Tweeting System)と、投稿された情報を地図上に表示するDIMS(Disaster Information Mapping System)で構成されています。当日は、秦野高校生徒会の生徒8名と教職員、東海大学の学生と教員がグループに分かれてまち歩きを行い、災害時に危険な場所や役に立つものなどを投稿していきました。その後、高校に戻って投稿した情報を共有し、意見交換を行いました(写真左)。

1月20日には、「熊本地震の経験を湘南地域の防災対策に活かそう!」と題した公開シンポジウムが開催されました。九州キャンパス長の荒木朋洋教授から、熊本地震の際に現場で起こったことと見えてきた

課題、今後について、阿蘇校舎で陣頭指揮を執られたご経験をふまえたリアルなお話をうかがいました。また、工学部の杉山太宏教授による「東海大学阿蘇校舎と地震断層」に関する講演や、チャレンジセンター熊本復興支援プロジェクトの活動報告、上述の秦野高校の生徒による実証実験の報告などがありました(写真右)。



実証実験でのまち歩きの様子

公開シンポジウムの様子

メディア掲載一覧

月日	分類	掲載メディア
サイエンスコミュニケーター		
9月5日-9月11日	テレビ	湘南ケーブルネットワーク
キャンパスストリートプロジェクト		
7月 1日	新聞	神奈川新聞
12月20日	新聞	神奈川新聞
Tokai Formula Club		
7月 1日	WEB	株式会社オートマックス
7月 6日	WEB	Star Japanese Conference 2017
10月 1日	新聞	日刊自動車新聞
10月 1日	WEB	株式会社HPCシステムズ
11月11日	テレビ	BSジャパン
11月25日	WEB	学生フォーミュラ大会公式ブログ
ライトパワープロジェクト		
4月 8日	テレビ	BS日テレ
5月 2日	WEB	クルマ、まるごと、グーネット
5月27日	WEB	LEVOLANT BOOST
5月28日	WEB	LEVOLANT BOOST
7月10日	WEB	Response
8月23日	WEB	soraе.jp
8月28日	新聞	中日新聞
9月15日	雑誌	モーターファン イラストレーテッド Vol.132
10月13日	WEB	時事通信、AFP BB NEWS、東京新聞、共同通信、北海道新聞、河北新報、中日新聞、下野新聞、茨城新聞、福島民報、信濃毎日新聞、静岡新聞、福井新聞、京都新聞、神戸新聞、中国新聞、山陰中央新報、徳島新聞、愛媛新聞、西日本新聞、長崎新聞、大分合同新聞、宮崎日日新聞、佐賀新聞、沖縄タイムス、デイリースポーツ、BIGLOBEニュース、NEWS PICKS、ORICON NEWS、55NEWS、レスポンス、Yahoo!ニュース
10月16日	WEB	産経新聞、八王子経済新聞、共同通信、毎日新聞、日本経済新聞、デイリースポーツ、東奥日報、山形新聞、福島民友、下野新聞、千葉日報、山梨日日新聞、静岡新聞、中日新聞、信濃毎日新聞、福井新聞、北日本新聞、京都新聞、神戸新聞、中国新聞、山陽新聞、山陰中央新報、徳島新聞、西日本新聞、長崎新聞、佐賀新聞、宮崎日日新聞、沖縄タイムス、琉球新報、BIGLOBEニュース、ORICON NEWS、55NEWS
11月11日	テレビ	BSジャパン

チャレンジプロジェクト協力団体・協力者一覧

（敬称略）

【メカトロマイスター】株式会社ミツバ、ソリッドワークスジャパン株式会社、株式会社プラスコンフォート
【キャンパスストリートプロジェクト】 秦野市建設部道路管理課、東海大学駅前商店会協同組合、株式会社ヨネザワ楽器、秦野市観光協会、社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園、秦野市大根地区自治会連合会日の出自自治会、秦野市大根地区南矢名第一長寿会
【病院ボランティアプロジェクト】 日本民謡 鳳蝶流、神奈川県立秦野総合高等学校 合唱部、秦野市民吹奏楽団、ミルキューエイベルクワイヤー、ちどりこどもクリニック、秦野市立大根幼稚園、教養学部芸術学科デザイン学課程　佐藤 花菜子、社団法人認知症高齢者研究所 羽田野 政治、東海大学医学部付属病院、東海大学医学部付属大磯病院
【札幌ボランティアプロジェクト】 南沢地区町内会連合会、藻岩地区町内会連合会、札幌市南区土木部、軟石や、南の沢児童会館、南沢旭台町内会
【あにまるれすきゅープロジェクト】動物愛護団体PHILIA(フィリア)、熊本県動物管理センター、ビッグハウス動物病院、株式会社ベティオ、熊本市動物愛護センター、熊本市動物愛護推進協議会、阿蘇くまもとシェルター
【3.11生活復興支援プロジェクト】大船渡市立越喜来小学校、特定非営利法人アーバンデザイン研究体、芝浦工業大学 作山研究室、泊区復興まちづくり委員会、有限会社片山建設、銚子林業木材加工所、社会福祉法人大洋会 青松館せせらぎ、相川・小指地区仮設住宅団地、小指地区自治会、有限会社ササキ設計、海産工房 ささき、登米町森林組合、ひらつな祭実行委員会、災害から未来を守る会、平塚大門会、プロジェクトOB 下田奈祐、東海大学工学部建築学科 杉本研究室、東海大学情報理工学部コンピュータ応用工学科 浅川研究室
【先端技術コミュニティACOT】 熊本県自閉症協会、特定非営利活動法人HITOプロジェクト、熊本市立西原小学校、熊本県高等学校教育研究会理化部会、田舎の体験交流館さんがうら、熊本県警察本部サイバー犯罪対策課
【東海大学学生ロケットプロジェクト】北海道大樹町役場企画課、国土交通省東京航空局帯広空港出張所、国土交通省東京航空局釧路航空事務所、国土交通省札幌航空交通管制部、国土交通省航空宇宙管理センター、北海道釧路方面広尾警察署、航空大学校帯広分校運用課、インスターテラテクノロジーシステムズ株式会社、一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム、上町すみれ会、夢工房咲く・咲く、特定非営利活動法人有人ロケット研究会、北海道工ア・フオーター株式会社、株式会社マルマツ建設、株式会社共成レントム、能代宇宙イベント協議会、株式会社ホーベック、有限会社スリーホープ、GEOSPOTS
【Beijo Me Liga】Escola Opcao、Colegio Logos、フオー・インストラクター 浜崎ヘナータ、竹文化研究者／ライター 橋口博幸、ピオダン・インストラクター 内田佳子、CRII-チルドレンズ・リ

月日	分類	掲載メディア
11月25日	テレビ	NHK
11月26日	テレビ	BSジャパン
東海大学学生ロケットプロジェクト		
8月17日	新聞	北羽新聞
8月19日	新聞	北羽新聞
11月 4日	新聞	十勝毎日新聞
11月 8日	新聞	北海道新聞
11月11日	WEB	Mogura VR
Tokai International Communication Club		
5月12日	WEB	タウンニュース(秦野)
7月 2日	新聞	神奈川新聞
7月 2日	WEB	Yahoo!ニュース
8月24日	WEB	神奈川新聞
8月31日	新聞	神奈川新聞
9月 1日	WEB	タウンニュース(秦野)
3.11生活復興支援プロジェクト		
4月 1日	テレビ	湘南ケーブルネットワーク
8月 5日	新聞	東海新報
8月 5日	新聞	岩手日報
8月10日	新聞	東海新報
8月17日-8月27日	新聞	朝日新聞(計28回連載)
8月19日	新聞	東海新報
9月14日	新聞	読売新聞
11月20日	新聞	朝日新聞
11月20日	新聞	岩手日報
11月21日	新聞	東海新報(大船渡)
11月24日	新聞	岩手日報(盛岡)
11月26日	ラジオ	FM湘南ナバサ
12月11日	新聞	琉球新報(那覇)
1月 1日	新聞	東海新報(大船渡)
3月 1日	情報誌	広報ひらつか
DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト		
6月24日	WEB	時事ドットコム
6月24日	WEB	共同通信(海外向け)
6月25日	WEB	Japan Today
6月25日	WEB/新聞	東京新聞
6月25日	WEB	OLYMPIC CHANNEL
6月26日	WEB	東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ
6月30日	新聞	スポーツニッポン

ソース・インターナショナル、神奈川県立有馬高等学校、特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園、Horizon Japan International School、神奈川県立小田原高等学校、学校法人湘南学園中学校高等学校
【熊本復興支援プロジェクト】国際ソロプチミスト長崎ガーランド、あやせ災害ボランティアネットワーク、一般社団法人やまと災害ボランティアネットワーク、特定非営利活動法人神奈川災害ボランティアネットワーク、一般社団法人RQ災害教育センター九州(RQ九州)、公益財団法人全国訪問ボランティアアナーサスの会・キャンパス熊本、益城町テクノ仮設団地、有限会社本ノ内農園、南阿蘇ふるさと復興ネットワーク 吉村孫徳
【ライトパワープロジェクト】パナソニック株式会社、パナソニック株式会社エコソリューションズ社、パナソニック株式会社オートモーティブ&インダストリアルシステムズ社、パナソニック映像株式会社、東レ株式会社、東レ・カーボンマジック株式会社、株式会社ブリヂストン、株式会社ミツバ、日本マイクロソフト株式会社、株式会社ソフトウェアアクリイドル、KYBモーターサイクルサスペンション株式会社、植木プラスチック株式会社、石塚工業株式会社、ダッソーシステムズ株式会社、ビジュアルテクノロジー株式会社、日野自動車株式会社、国立研究開発法人産業技術総合研究所、有限会社三島木電子、飯田通商株式会社、ベクター・ジャパン株式会社、サンスター技研株式会社、株式会社スマートビジョン、株式会社ソーアップ、有限会社フジアロイ、株式会社ジェイテクト、株式会社三協、株式会社プロジェクト・ミュー、株式会社和光ケミカル、株式会社ハイトラ、株式会社日本デジコム、日本ケミコン株式会社、Lapp Japan株式会社、株式会社プロテクタ、九重電気株式会社、チームTEEDDA、大正製薬株式会社、人気酒造株式会社、トヨタ自動車株式会社、鹿島化学金属株式会社、有限会社スリーホープ、沼田製作所、東映シーム株式会社、株式会社BSジャパン、株式会社テレビマンユニオン、日本放送協会、株式会社レイジウ、神奈川県、秋田県大湯村、神奈川県立平塚工科高等学校、独立行政法人国立高等専門学校機構 小山工業高等専門学校、平塚市立みずほ小学校、平塚市立金目小学校、秦野市立大根小学校、秦野市立鶴巻小学校、秦野市立広畑小学校、一般社団法人太陽光発電協会、一般社団法人日本太陽エネルギー学会、平塚商工会議所、在日米海軍厚木航空施設、伊勢原自動車学校、情報理工学部情報科学科長研究室、中島研究室、情報理工学部コンピュータ応用工学科山村研究室、理学部数学科山本研究室、工学部機械工学科橋本・落合・砂見研究室、東海大学機友会、東海大学望星学塾、東海大学三保研修館、東海大学付属静岡翔洋高等学校・中等部、東海大学付属本木記念幼稚園、東海大学情報技術センター、東海教育産業株式会社
【阿蘇援農コミュニティプロジェクト】産山村弁財天営農集落組合、熊本県 農林水産部 農村振興局 むらづくり課 くまもと農人プロジェクト
【Tokai Formula Club】スズキ株式会社、トタル・ルブリカンツ・

月日	分類	掲載メディア
9月28日	情報誌	タウンニュース(平塚)
9月29日	情報誌	タウンニュース(秦野)
熊本復興支援プロジェクト		
7月21日	情報誌	タウンニュース(綾瀬)
Takanawa 共育プロジェクト		
5月21日	新聞	東京新聞
7月 1日	WEB	地域ポータルサイト「プラたか.net」
Challenge for the Borderless World		
8月12日	WEB	時事メディカル 全国医療系サール情報サイト CIRCLES
先端技術コミュニティACOT		
6月 5日	WEB	T1Park
8月 1日	雑誌	T1Park
11月11日	TV	テレビ熊本
阿蘇援農コミュニティプロジェクト		
6月16日	新聞	熊本日日新聞
8月 3日	WEB	T1Park
8月 9日	テレビ	RKK熊本放送
8月10日	新聞	熊本日日新聞
8月12日	情報誌	堂雷時代
11月 4日	WEB	産経新聞
11月 5日	新聞	日本農業新聞
11月15日	新聞	熊本日日新聞
札幌ボランティアプロジェクト		
10月30日	情報誌	広報さっぽろ

チャレンジセンター長賞

プロジェクト活動を通じて社会に貢献できる「自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力」を身に付けた学生に対し、「チャレンジセンター長賞」を授与しています。2017年度は4キャンパス15名が選ばれました。

- 【受賞要件】
①チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者（継続していなくてもかまわない）
②プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
③修了認定を2回以上受けている者
④卒業が決定している者

チャレンジプロジェクト学科別参加人数

学部	学科	人数
国際文化学部	地域創造学科	2
	国際コミュニケーション学科	17
	デザイン文化学科	3
生物学部	生物学科	31
	海洋生物科学科	21
情報通信学部	情報メディア学科	10
	組込みソフトウェア工学科	10
	経営システム工学科	10
	通信ネットワーク工学科	6
	文明学科	10
文学部	アジア文明学科	11
	ヨーロッパ文明学科	4
	アメリカ文明学科	6
	北欧学科	3
	歴史学科日本史専攻	5
	歴史学科東洋史専攻	2
	日本文学科	6
	文芸創作学科	3
	英語文化コミュニケーション学科	17
	広報メディア学科	18
心理・社会学科	13	
観光学部	観光学科	25
政治経済学部	政治学科	13
	経済学科	11
	経営学科	29
法学部	法律学科	25
教養学部	人間環境学科自然環境課程	10
	人間環境学科社会環境課程	9
	芸術学科音楽学課程	8
	芸術学科美術学課程	3
	芸術学科デザイン学課程	1
	国際学科	34
	体育学部	体育学科
理学部	生涯スポーツ学科	23
	スポーツ・レジャーマネジメント学科	53
情報理工学部	数学科	6
	情報数理学科	4
	物理学科	8
	化学科	35
	情報科学科	4
工学部	コンピュータ応用工学科	8
	生命化学科	12
	応用化学科	25
	光・画像工学科	10
	原子力工学科	6

校舎名	プロジェクト名	氏名	リーダー経験年度
湘南	病院ボランティアプロジェクト	梶原大輔	2015年度
	スポーツ社会貢献プロジェクト	齋藤愛	2016年度
	サイエンスコミュニケーター	山中梓	2016年度
	環境キャラバン隊	木村勇輝	2016年度
	キャンパスストリートプロジェクト	福田尚史	2016年度
	Tokai Formula Club	小川和輝	2016年度
	ライトパワープロジェクト	伊藤参里	2016年度
	東海大学学生ロケットプロジェクト	中嶋大介	2017年度
	Beijo Me Liga	瀧本健	2015年度
	Tokai International Communication Club	倉升克幸	2015年度
	3.11生活復興支援プロジェクト	高橋直也	2015年度
	DAN DAN DANCE AND SPORTS プロジェクト	横堀美咲	2015-2017年度
熊本	先端技術コミュニティACOT	中島祐人	2016年度
	メカトロマイスター	富田恭平	2016年度
	熊本地域プロデュースプロジェクト	大庭悠登	2016年度
阿蘇	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	狩野幸花	2016年度
	あにまるせすきゅー	片岡岳志	2016年度
	阿蘇は箱舟プロジェクト	福村拓哉	2016年度
札幌	札幌ボランティアプロジェクト	佐野加奈子	2016年度

学部	学科	人数
工学部	電気電子工学科	47
	材料科学科	15
	建築学科	33
	土木工学科	11
	精密工学科	24
	機械工学科	39
	動力機械工学科	94
	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	78
	航空宇宙学科航空操縦学専攻	6
	医用生体工学科	8
医学部	医学科	30
健康科学部	看護学科	3
	社会福祉学科	1
海洋学部	海洋生物学科	1
経営学部	経営学科	12
	観光ビジネス学科	25
基盤工学部	電気電子情報工学科	48
	医療福祉工学科	8
農学部	応用植物科学科	155
	応用動物科学科	104
	バイオサイエンス学科	43
	学部生 計	1,387
大学院	総合理工学研究科総合理工学専攻	1
	理学研究科化学専攻	2
	工学研究科電気電子工学専攻	1
	工学研究科応用理化学専攻	3
	工学研究科建築土木学学専攻	1
	工学研究科機械工学専攻	8
	産業工学研究科情報工学専攻	1
農学研究科農学専攻	2	
	大学院生 計	19
	合計	1,406

※チャレンジプロジェクト学生が在籍している学部・学科および専攻のみを抜粋しております。

広報媒体 (ポスター・チラシ・パネル他)

〈チラシ〉



ライトパワープロジェクト

〈パンフレット〉



〈チラシ〉



サイエンスコミュニケーター

〈ポスター〉



病院ボランティアプロジェクト

〈ポスター〉

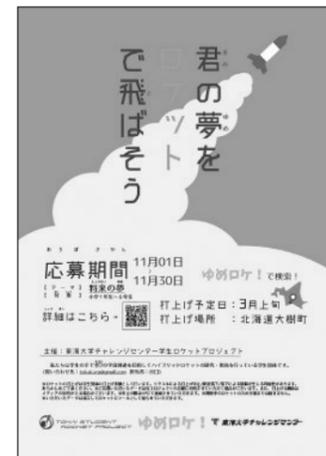


〈パネル〉



Tokai Formula Cub

〈スライド〉



東海大学学生ロケットプロジェクト

〈チラシ〉

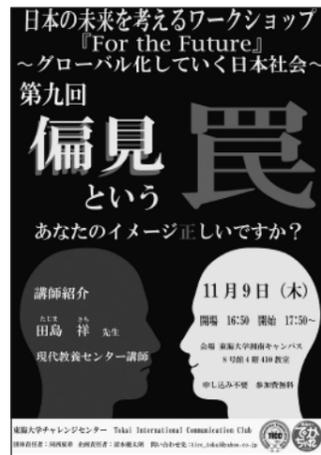


DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト

〈ポスター〉



〈パネル〉

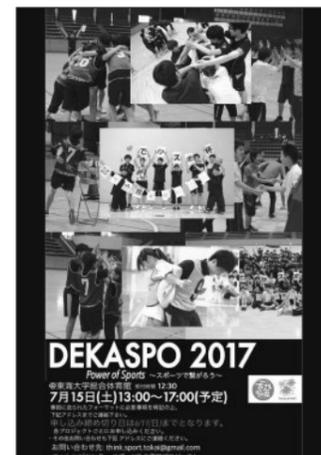


Tokai International Communication Club

〈パネル〉



〈チラシ〉



スポーツ社会貢献プロジェクト

〈チラシ〉



〈チラシ〉



Beijo Me Liga

〈ポスター〉



キャンパスストリートプロジェクト

〈ポスター〉



〈ポスター〉



熊本復興支援プロジェクト

〈チラシ〉



3.11生活復興支援プロジェクト

〈ポスター〉



Challenge for the Borderless World

〈ポスター〉



Takanawa共育プロジェクト

〈ポスター〉



メカトロマイスタープロジェクト

〈チラシ〉



阿蘇援農コミュニティプロジェクト

